『日本山海名産図会』（一七九九）の成立事情と系譜を辿って

堀内アニック

1．はじめに

『日本山海名産図会』は寛政十一年（一七九九）に大坂で初めて刊行された五巻五冊本の書物で、現在日本内外の図書館で百部以上の伝本がある。日本古典籍総合目録データベースによると、最も古い版は寛政十一年版[1]で、それ以後、寛政十二年（一八〇〇）、文化十三年（一八一六）、文政十三年（一八三〇）、天保十一年（一八四〇）と版を重ね、十九世紀前半にわたって日本各地で売り出されたロングセラーである。

海外の図書館に多く伝わっているのは、その挿画の写実性が早くから評価されていたためだと思われる[2]。日本では同じ理由で、明治に入ってもその図が継続して利用されている[3]。

そして、現代においては、『日本山海名産図会』（以後『名産図会』と略す）の絵は近世の産業の実態を知る上で貴重な資料として扱われている。それにもかかわらず、本書の研究は決して充分とは言いがたく、その絵が蔀関月（しとみかんげつ）（一七四七―一七九七）の作であることはわかっていても、本文の成立事情に関しては多くの疑問点が残っている。

『名産図会』の主な先行研究としては、以下が挙げられる。（1）千葉徳爾編『日本山海名産・名物図会』（社会思想社、一九七〇年）における編者解説、（2）複製版『日本山海名産図会』（名著刊行会、一

九七九年）における樋口秀雄の解説、（3）長谷章久編『日本名所風俗図会 巻16・諸国の巻1』（角川書店、一九八二年）における編者解説、（4）多治比郁夫「『山海名物図会』と『山海名産図会』―著者と出版事情―」（第二十九回杏雨書屋特別展示会［一九九七年十一月］目録所収）[4]。また商品学の観点からこの書を扱っている浅岡博の論文も参考になる[5]。

本稿では、まず『日本山海名産図会』の序文・跋文、『日本山海名物図会』との関係、画工の蔀関月のプロフィール等を参考に、本書の編纂をめぐる問題点を確認する。その解決の糸口として、①当時の大坂の出版界の動向を探り、②本書の内容に深く踏み込み、その学問性及び絵図の写実性を考察する。最後に、付記において、『名産図会』と密接な関係にある杏雨書屋所蔵の写本『平賀源内物産考』を考察し、その編纂に関する新たな見解を提示する。

2．『日本山海名物図会』と『日本山海名産図会』

『名産図会』は、『日本山海名物図会』というほぼ同名の書物と合わせて論じられることが多い。もっとも、『日本山海名物図会』（以後『名物図会』と略す）の初版は、宝暦四年（一七五四）、すなわち四十五年前に刊行されている。樋口秀雄の研究によれば、『名産図会』は『名物図会』の続編として明和年間に企画されたが、続編が完成するまでに、多くの年月が経ち、その編纂に携わる人間もその間一変している[6]。とはいえ、両書の間には、密接な関係があるので、ここでそれをまず確認しておきたい。

『名物図会』の書誌的事項をまとめると以下のようになる[7]。

『名物図会』は、五巻五冊本として、宝暦四年に初版が大坂で刊行され、その後、幾たびか再版されている[8]。奥付には、撰者・平瀬徹斎（ひらせてっさい）、画工・長谷川光信（はせがわみつのぶ）、彫工・藤江四郎兵衛（ふじえしろべえ）の名前が明記されている。著者の平瀬徹斎は「赤松閣」、または「千種屋新右衛門」なる屋号を持つ書肆でもあり、刊記に「板元千種屋新右衛門」とあるので自著の板元であったことがわかる。跋文は赤松閣・平瀬鬼望[9]なる人物の筆により[10]、『名物図会』の趣旨について以下のように述べる。

> 諸国山川海陸の物産に世をいとなむものを尋もとめて、價を施して得たる所の現在の図なり。證とするに足れり。およそ人其職分の本をしらは、おのつから財宝を得るの便ならん。此書世のために益なしといはんや。なおここにもれたるは追々に見聞して物産の大成を期するのみ[11]。

すなわち、①『名物図会』の図は、日本各地の物産に携わる者を訪ね、代価を支払って手に入れたものなので、信頼するに足る。②商売の根本である生産を辿れば、自然とその繁栄に導く鍵を得る。

③本書では扱えなかった産物については、追って調査を継続し、補う計画である。

平瀬鬼望の跋文によれば、『名物図会』は亡父平瀬徹斎の作である。平瀬という書肆は文筆家を兼ね、宝暦から安永年間にかけて活動し、草野・鬼望・補世等の号を使用していた。自家刊本の序文を多く書いているため、樋口はこの跋文も徹斎自身の筆による可能性を指摘しているが[12]、跋文に「先考平瀬徹斎云々」とある以上、跋文の著者の鬼望と本の著者徹斎は別人であり、父の死後、息子が家業を継いで『名物図会』を出版したと見る方が自然である。

以上まとめると、『名物図会』は千種屋（赤松閣）[13]（本名・平瀬徹斎）という大坂の書肆が、当時名の知れた生産地に情報を求め、図会にまとめたもので、この大規模な企画は息子の鬼望によって受け継がれた、ということになる。

『名産図会』もほぼ同じ目的で編纂されたと考えられるが、序文・跋文からは手がかりは得られない。奥付には画工・法橋蔀関月とあるだけで、蔀関月がその著者であるとは確定できない。この『名産図会』の成立事情において不明瞭な点が多いのは、何よりも蔀関月が寛政九年十月に没していることに由来する。序文・跋文は寛政十年の日付を持ち、『名産図会』が売り出されたのは寛政十一年正月、関月が他界して一年以上後のことである。すなわち、『名産図会』は関月の遺稿をもとに編集され、出版されたことになる。

3．画工の蔀関月

では、蔀関月とはどのような人物だったのか。彼は最初、大坂風俗画の祖とされる月岡雪鼎（つきおかせってい）（一七一〇―一七八六）に学び、後に、広く和漢の画法を研究して人物山水画を描き、ついには独自の画風を確立したとされる。明和五年（一七六六）ごろから活動を始め、初期は「柳原源二郎」という名前で絵を描いていた[14]。天明二年（一七八二）には「法橋（ほっきょう）」という称号を獲得する。近世では、少数の京の寺院が朝廷に代わって、有能な絵師や医師に僧の位階にならった「法橋」や「法眼（ほうげん）」という位階を与えていた。これを名乗ることは、朝廷や幕府の信任を得た絵師であることを意味した[15]。蔀関月はまた文芸界でも名が知られていた。彼は大坂の学問所である懐徳堂の学者と親しく交流し、九年以上懐徳堂内の部屋を借りながら[16]、学問所の画事に積極的に加わっていた[17]。その関係で、片山北海（かたやまほっかい）（一七二三―一七九〇）を盟主とする漢詩サロンで当時多くの優れた人材を吸収していた混沌詩社（こんとんししゃ）の文人たちとも交流があった。後に見る木村蒹葭堂も、混沌詩社で大いに活躍した人物の一人である。

蔀関月が『名産図会』の絵を任されたのは、いつごろのことだったのか。後にも言及するが、秋里籬島（あきさとりとう）作、竹原春朝（たけはらしゅんちょう）斎画による一連の「名所図会」が上方の出版界を席巻するのは、安永九年（一七

八〇）以降である。竹原春朝斎（生年不詳―一八〇一）が同じ大坂の絵師だったことが関係してか、関月は、このコンビに対して、強い対抗意識を抱いていたとされる。[18]『名所図会』の商業的成功の影響で、大坂の書肆が同類の企画に乗り出そうと考えたことは十分想像できる。[19]決定的な証拠はないが、『名産図会』の出版企画も天明初年、すなわち関月が法橋に叙された時期に再び軌道に乗ったと推測できる。

関月の作品に、『名産図会』とほぼ同じ時期、寛政九年（一七九七）五月に刊行された五巻付録一冊の『伊勢参宮名所図会』がある。『名産図会』同様、多くの伝本が現存する書物である。奥付に作者の名前の記載はないが、跋文が関月の画業を話題にしているので、関月の作品だと推察できる。[20]また、『開板御願書扣』という大坂本屋仲間の記録によれば、寛政九年五月に書肆鹽屋忠兵衛が蔀関月作『伊勢参宮名所図会』の開板願いを届けている。[21]この書物はすでに二年前の寛政七年十二月に三冊本として開板が許されていて、寛政九年には増補訂正を加えての発行の願い出だった。[22]この資料によれば、『伊勢参宮名所図会』の作者は蔀関月一人である。すなわち、晩年の関月は図会類の制作に奮闘していたことになる。一方、彼の名前が刊本に記されていないことは、出版が複雑な経緯を辿ったことを暗示している。

『伊勢参宮名所図会』の絵は「名所図会」というジャンルの規範に従って、歴史画と風景画が中心になっており、同時代人の営みに焦点が当てられているものは少ない。『名産図会』の絵には、後にも述べるが、その点に大きな特色がある。人間の労働、表情や動作を描く絵師としての蔀関月の才能が、遺憾なく発揮されている。

これと関連して一つ注意すべきは、関月はまだ駆け出しの絵師で「柳原源二郎」という名前で絵を描いていたころに、「千草屋」という屋号の書肆を大坂で営んでいたことである。[23]この名前は、平瀬の屋号と一致するので、[24]何らかの関係があったのではないかと推測される。その後は、法橋になり、書肆を廃業しているが、晩年まで「関月が深く出版に関わる環境の中で活動していた」[25]ことは、この関係に由来すると思われる。

4．木村蒹葭堂の序文

『名産図会』の序文は当時知識人として全国的に高い名声を得ていた木村蒹葭堂（一七三六―一八〇二）による。『名産図会』の本文も木村蒹葭堂の作だとする見解があるが、[26]決定的な根拠があるわけでなく、本論文では、この点をとりわけ慎重に扱いたい。この漢文序ではまず、筆者が以前企てた『名物独断』という本草・物産方面の研究をまとめるつもりで書き始めた書物の話から説き起こす。題名は、本草の大家稲生若水（一六五五―一七一五）の失われた著書

『採草独断』に倣ったという。ここでいう「名物」は、『名物図会』の「名物」とは多少意味が異なり、当時の本草家の好奇心を駆り立てる広範囲の物を指し、本草・物産の学びの対象そのものである。序文でも「人の未だ見ざるところ」のもの、「人の未だ弁ぜざるところ」のものと言って詳しい定義をさけている。そして、その調査中に、あまりにも「名物品類窮まりない」ので、『名物独断』では、醸造の法に焦点を絞ることにした。しかし、原稿が出来上がって間もなく、家が多難にあい、原稿をほとんど失ったという。

ここでいう多難は、寛政元年（一七八九）幕府の酒造石高改めの際、過醸が発覚し責任を問われた事件を指している。酒造を営む家に生まれた兼葭堂は、生産は支配人に任せていたので、罪人とは見なされなかったものの、町の年寄役を罷免され、立場が一転した。このため一時期大坂を離れていたが、留守中大坂の屋敷が類焼したことも災難のうちに含まれる。[27]

木村兼葭堂は、様々な分野に造詣が深く、本草には、少年のころから強い関心を示し、生涯絶えず研究を積み、四十九歳の時に京で私塾を開いていた本草学の大家小野蘭山（一七二九―一八一〇）に弟子入りするなどして、当時最先端の知識を身につけていた。自著としては、寛政七年（一七九五）刊の漢文書『一角纂考』（二巻）がその広範囲の知識をよく表している。古くからその牙が生薬として交易されていた「一角獣」（ウニコール）なる動物に着目し、それにまつわる説を広く中国と西洋の書物に求め、実は北極海に住むクジラの一種であることを証明する一冊の蘭書を紹介し、その正体を明らかにしている。[28] 兼葭堂はとりわけ中国の文物に詳しく、蔵書家、学者、詩人、画人としても、中国趣味の傾向が著しかったことが注目される。[29]

さて、木村兼葭堂は、序文で、『名産図会』の内容を「輙挙吾東方各従其地産。奇種異味。而特名者。一々見之図。乃至其製作之始末事実之証拠。則後加附釈。雖婦児輩。使通知之」と評している。すなわち、もっぱら日本の優れた産物に着目し、特に名高いものに対しては、一々写生図、生産の始末や事実の証拠を添え、さらに著者の解釈も加え、婦人子供であっても理解できるよう気を配っていると賞賛しているのである。さらに、絵は亡友蔀関月の手によるものなので、依頼された序文を引き受けざるをえず、彼が過去に企てた書物の本意を述べることによって、本書の縁起に代えたと説明する。

ここで、蔀関月と木村兼葭堂の関係に着目したい。関月が、懐徳堂や混沌誌社を通して木村兼葭堂と交流があったことはすでに述べたが、兼葭堂の日記にも二人の親しい間柄が現れている。天明期から懇意であったと見え、寛政八年（一七九六）には、「関月」の名前が四度も記され、その内、三度は訪問者としてではなく、共に外出する相手としてである。あいにく関月の没年である寛政九年の日記は残っていないが、『名産図会』の執筆時に二人が頻繁に会っていた

ことは注目に値する。[30]

この序文には蒹葭堂が『名産図会』の執筆に関わったことを暗示する言葉はまったくない。本書は、木村蒹葭堂が世に出した文人や学者向けの出版物とは質的に違うことが注意される。一方、序文では広い読者層を視野に入れた本書を賞賛しているので、当時の大坂の出版界の動向を支援する立場であったことを示している。彼はまた文化三年（一八〇六）に刊行された『唐土名勝図会』の発案者であり、この種の書物の出版にも関心があり、実際にも関わった形跡がある。[31]

5．『名産図会』の跋文及び書誌的事項

『名産図会』の跋文は、序文とは対照的に擬古文体で書かれている。署名として「なにはえの、みち、しるす」とあるだけなので、筆者が誰であるか定かでない。そのため、これも木村蒹葭堂によるものだとする見解があり、支持者は多い。[32]

以下に引用する跋文の書き出しは、編纂の経緯について重要な情報を提供しているが、不明瞭な点も多い。[33]

こよ、補世ありしほどにおもひはじめにたる木の下露を、みなの川波のかずかずになん、かきながしぬる関月がいさほしなりけり。そも、遠つ国のたどりかたきハ、そこのよすがもとむなどしつつ、としごろのへゆくをもさるものにて、ほとほとまうけんきはになん。[34]あからさまにあつめぬる、かつ、おもはすにしてとはで聞えぬ。かくて、まなひ子藍江その名残につきて、露けし袖の外に、ほころふるふしををきぬひ侍り。おのれ亦かたはらのことに、丈をたちいらへつ。[35]つゐによるせありていつもの花の五巻とはなりぬ。[36]

すなわち、「平瀬補世（平瀬鬼望の別名で、徹斎の息子を指す）が生存中に発案したこの企画は時が経つにつれて内容を膨らませていった。それは、主に絵師の蔀関月の功績である。遠方の国で、調査が困難な場合は、頼りになる人を求めたりしたため、長い年月が経つのももっともなことで、いよいよ（原稿をまとめる?）時分になって、慌てて集め、かつ注意を払わずにするなど、とんでもないことだ[37]（この部分はこのままでは理解しにくいが、おそらく関月の死が原稿の分散を招いたことを意味しているのだろう）。こうして、弟子の中井藍江（一七六六―一八三〇）が師との別れを惜しんで、原稿の欠落した部分を補いまとめた。最後に跋文の筆者はかたわらのことにおいて、長さを調整して依頼に答えた。ついには、拠り所あって、みごとな五巻本に仕上げることができた。」

こうして、『名産図会』が複数の大坂の知識人、画工及び書肆の協

力によって完成した作品だということが明らかになった。まず、平瀬補世が蔀関月と組んでこの企画に乗り出し、補世没後は、蔀関月がその責任を一人で担った。[38] 刊記に関月の名前が唯一掲げられていることも、その役割が大きかったことを表している。関月没後、少なくとも二人の人物が手を加えている。すなわち、弟子の中井藍江と跋文の執筆者である。藍江は、巻之一の目録に、署名入りの山水画を添えている。彼は、関月の筆致に近い人物画や山水画を描き、懐徳堂の文人とも交流があったので、この企画を引き継ぐに最も適した存在だった。藍江による絵が紛れていた場合、見極めるのは難しい。[39]

跋文の筆者による増補の度合いに関しては、本書の書誌的事項によって、いくらか示唆が得られる。多治比郁夫の研究によると、まず、『名産図会』の開板願いは「作者故平瀬補世、画工蔀関月、開板人千種屋平兵衛」の名で、寛政七年十一月、すなわち関月生存中に本屋仲間に届けられた。この時点では、『名産図会』は合計九十八丁の五冊本で、故平瀬補世の作となっていた。板元は、千種屋新右衛門ではなく、平兵衛だが、同じ千種屋であるので、分家である可能性がある。この状況は、出版された寛政十一年には一変している。蔀関月の名前のみが記され、販売人は鹽屋長兵衛、蔵板者は高木遷喬堂となっている。[40] それに加え、本文が大幅に増丁され、百五十五丁となっている。通常、増補訂正を加える時は、再度開板願いを出すのが習わしなので、これは全く異例なできごとだったと言える。[41]

すなわち、関月没後、その遺稿は何人もの書肆の手に渡り、出版される運びとなるが、その遺稿に不備があったためか、または商業的なねらいがあってか、第三者の手を借りて、増補訂正された。その作業は寛政十年に集中していたと思われる。すると、跋文の筆者の役割は決して軽視できないことになる。

蔀関月の晩年の著作だとされる『伊勢参宮名所図会』には、寛政九年（一七九七）閏七月の日付の跋文がある。この「伊勢名所図会のしりにしるす」と題される跋文は、『名産図会』のそれと書体も文体もきわめて類似しており、同一人物によるものと考えてもおかしくない。一方、『伊勢参宮名所図会』の跋文も匿名で、署名には「なにはの海驢識」とあるだけである。[42] この海驢に関しては、『名産図会』巻之五、「膃肭獣」の項目の末尾に、『日本紀』の神代巻を引いて、海驢の古名が「ミチ」であると述べている。これで『名産図会』の跋文の「なにはへの、みち、しるす」の意味がはっきりし、同時に両跋文が同じ人物によることが傍証される。

『伊勢参宮名所図会』の跋文から、その筆者が蔀関月と親しい間柄にあり、書肆が競って出版を急ぐ中、病に苦しむ関月に同情して、道中の見聞を記して力になろうとした人物であることがわかる。しかし、女・子供でも読める文章を書くように努めたため、結局はまとまりのない結果となったと述べている。[43] 永野仁は、この証言から、

跋文が『伊勢参宮名所図会』の著者自身、すなわち秦石田（別名村上石田）（生没年不詳）によるものだと結論している。[44]

『伊勢参宮名所図会』には、既に述べた通り、著者名も画工名も記されておらず、寛政九年五月に蔀関月作として開板願いがとどけられているので、著者を秦石田とすることは、関月の作品を完成させたのが石田であることを意味する。少し話が複雑になるが、永野の議論は以下のようにまとめられる。

著者が秦石田であることは、文化十一年（一八一四）刊の『近江名所図会』から推論できる。寛政九年刊とされてきたが、初刊は文化十一年とするのが正しい。『近江名所図会』は商業的な目的で作られた書物で、既刊の『伊勢参宮名所図会』、『木曽路名所図会』及び『二十四輩順拝図会』の三書から近江に関わる版木を流用してできたものである。『木曽路名所図会』（一八〇五刊）は秋里籬島（生没年不詳）と西村中和（生没年不詳）による作品で、前者が序文、後者が跋文を書いている。『二十四輩順拝図会』は前編享和三（一八〇三）・後編文化六（一八〇九）刊の作品であるが、これからはほんの数丁しか流用されていない。

『近江名所図会』の扉に編者名として、秦石田と秋里籬島、画工名として蔀関月と西村中和が記されている。これが『伊勢参宮名所図会』、『木曽路名所図会』の編者及び画工を指すと解釈し、『木曽路名所図会』の編者と画工名を差し引くと、秦石田が『伊勢参宮名所図会』の編者であると結論できる。同時に、画工も蔀関月であることが確定できる。ただし、なぜ石田の名前は『伊勢参宮名所図会』の中で伏され、十七年後に初めて公表されたのかという問題が残る。

秦石田（村上石田）は大坂の篆刻家で、著作としては、すでに述べた『伊勢参宮名所図会』に加えて、寛政十三年刊の『算薮かな付』と文化元年（一八〇四）刊の『播磨名所巡覧図会』が知られているだけである。[45]『播磨名所巡覧図会』は、画人中井藍江と組んで作成されたもので、出版当時、石田はすでに故人となっていた。[46]中井藍江の跋文の書き出しに、石田の名前が出ており、その著者であることが確認できる。

『伊勢参宮名所図会』の作成に関月と協力していた人物が、『名産図会』の完成にもかかわったとしても不思議ではない。以上、永野仁の論をもとに、『名産図会』の跋文の著者を石田とし、彼が蔀関月の晩年の仕事に密接に関わり、その編纂を完遂させた人物であると断定できる。

このような経緯は本書に複合的な性格を与えたと想像できる。以下、それを具体的に見てゆくが、その前に、本書の題名をもとに、この書物の文化的背景について考えたい。

6．『日本山海名産図会』の題名からわかること

「日本」を一国名として掲げる書物は、明治時代になると急増するが、十八世紀初頭においては、さほど多くない。その中でも地誌類（『日本水土考』享保五年［一七二〇］刊[47]や『日本鹿子』元禄四年［一六九一］刊）、日本地図（『日本海山潮陸図』元禄四年［一六九一］刊[48]）、または日本の歴史や朝廷を扱う書物（『日本紀』、『大日本史』[49]、『日本国事跡考』［一六四三］、『日本歳時記』貞享五年［一六八八］刊）が大多数を占めていると思われる。日本の風土、自然、産物を扱う『大和本草』宝永六年（一七〇九）刊や『和漢三才図会』正徳二年序（一七一二）は、「やまと」「和国」或いは「本朝」という表現を利用し、「日本」ということばを利用しない[50]。元禄時代には、「和」は「漢」に対比され、日本を主題にするとしても、中国の学問の枠内で扱われていることが多い。十八世紀前半には、まだ地理的にも、学問的にも、中国を越えて世界を見つめるスタンスは確立していなかったからだと説明できる。十八世紀後半になると、蘭学や国学の勃興に伴って、「一国」としての日本という視点が確立しつつあり、自国に対する自負心が現れる。宝永四年版の『日本山海名物図会』には、扉及び巻頭にこの題が掲げられている[51]。日本という国を謳歌するのに、朝廷の儀礼や故事だけでなく、各地の風景や産物が利用されることは、この時代の新気運を表しているように思える。

題名に含まれる「山海」ということばは当時の名所図会で描かれる通常の日本の都市や農村とは違う別の空間を表している。後で見ていくように、この書物の巻之一は伊丹の酒造りを紹介しているので、「山海」という形容は当てはまらないが、巻之二、三、四、五の大部分はまさに山海の産物が主題で、とりわけ、漁業に当てられた項目が目立つ。山間や海浜で、時には命がけで働く人間を生き生きと描いているところに、本書の特徴がある。「山」や「海」に住む人々の活動を積極的に可視化することが本書の一つの目的だったと言える。

最後に「名産」という表現について考えてみたい。これは現在では「名物」と同義語になっているが、「名物」の方が歴史が長い言葉である[52]。すぐれたものや名高い人物が所持したものを平安時代から指し、茶の湯が流行する頃には、古くから伝わる茶道具などを「名物」と形容するようになる。また、室町後期からは「その土地特有の名高い産物」をも指すようになり、「名産」も同時代に、一定の土地の優れた土産という意味で使われはじめる。土産にしろ、名物・名産にしろ、近世の日本人にとって、馴染み深い言葉である。

その理由の一つとして、十七世紀を通じて、旅をする機会が増え、各地の産物に対する関心が高まったことが挙げられる。『和漢三才図会』の巻六十五〜巻八十は日本六十八国の地誌に当てられている

が、各国に対して、神社仏閣名所の後に「土産」という項目を設けている。これは古くから伝わる地誌の構成に倣っているのだが、十八世紀の初頭に、各地の産物が、一般教養の範囲に入りつつあることがうかがえる。産物に対する好奇心は日本国内のものに限られてはいなかった。西川如見（一六四八―一七二四）の元禄八年（一六九五）刊『華夷通商考』は、「鎖国」下において初めて中国や西欧諸国の位置、風土、人口、風俗、土産を紹介したことで有名である。

また、産物に対する好奇心をさらに強めたのが、全国規模で発展した商業である。大坂・京・江戸では、多くの地方産物が市や店頭にならぶようになる。興味深いことに、『和漢三才図会』[53]の摂津国の土産の欄で、大坂の市場について以下のように述べている。

凡大坂ハ天下ノ大湊ナリ。故万物是ニ於テ交易シテ不断市ヲ為ス。故土産ノ物ニ非ズト雖モ、皆土産ノ如シ。[54]

すなわち、大坂には絶え間なく産物が交易によって持ち込まれ、売買されている。大坂の産物でなくても、まるで、その土地の産物のように見えるというのだ。このように、大坂の住民は、産物が溢れる環境に置かれていたわけで、その中で、商品を求めるのに便利な手引書を歓迎したことは自然のなりゆきであった。[55]

これに加えて、徳川吉宗の時代になると、諸国に対して「産物帳」の作成や物産を奨励する幕府の政策が起こり、自国の産物を宣伝し、広く流布しようとする動きが生じる。[56]十八世紀後半には、さらに大坂や江戸で「薬品会」などの催しが行われ、はるばる珍しい産物を取り寄せて、展覧する新しい機運がおこる。[57]このように、十八世紀の後半は日本内外の産物に対する好奇心が一つの頂点に達する時期なのである。

「名物」とか「名産」ということばが本の題名にもあらわれるようになるのは、まさにこの時期と一致する。「名所図会」や「名勝図会」と同様に、名声や評判を強調することは当時の読者層にアピールする有力な手口と書肆がみなしていたと考えられる。では、ある産物が「名産」と称される根拠はどこにあるのか。『名産図会』は、これから見ていくようにこの問いに答えるためのいくつかのヒントを与えている。それは生産の技術、生産量、品質、原料の信頼度などいくつもの要因に由来していると考えられる。

7．『日本山海名産図会』の文化的・商業的背景

『名物図会』も『名産図会』も「図会」が題名に付き、当時の出版物の一つのジャンルに属している。では、このジャンルの著作に共通する特徴とは何だろうか。この問いに答えるのは容易でない。この種の著作は膨大な数にのぼり、江戸時代を通じて、絵の比重や画

法の上で微妙に変化しているからだ。

日本で題名に「図会」がつく書物としては、正徳二年序（一七一二）の『和漢三才図会』がもっとも早い例だ。これは周知の通り、全百五巻の絵入り百科事典で、大坂でまず販売された作品である。[58] 著者の寺島良安（一六五四―没年不詳）は大坂の御城入医師で明万暦三十五年（一六〇七）刊の『三才図会』に刺激を受けて、この大事業に踏み切ったとされる。『和漢三才図会』は草木類、禽獣類、魚介類、器材類、食服類や天文、日本・中国の地誌など、広範囲の項目を設ける画期的な事典であった。後にも見るように、物産にかかわる内容も少なくない。[59] 漢文体の説明は和漢の古典にもとづき内容が豊富だったので、知識層を対象にしていたと思われる。

『和漢三才図会』は、その構成や内容の上で画期的だったが、十八世紀初頭にはすでに数多くの絵入事典が流通していた。寛文六年（一六六六）刊の『訓蒙図彙』（二十巻）などは、当時の出版状況を考えると、非常に野心的な書物で、天文・地理・居処・人物・身体・衣服・宝貨・器用・畜獣・禽鳥・龍魚・蟲介・米穀・菜蔬・果蓏・樹竹・花草の部門に分けて一四八四もの事物の図と名称を挙げている。これを皮切りに次々と絵入事典類が発表され、元禄、正徳、享保時代を通じて『訓蒙図彙』の増補改定版、『人倫訓蒙図彙』元禄三年刊（一六九〇）や『唐土訓蒙図彙』享保四年刊（一七一九）のように「訓蒙図彙」を標題に含み、一定の分野の事物を系統的に取り上げる事典が、京、大坂を中心に多く出版されている。[60] 『訓蒙図彙』は主に図と名称（漢名、異名など）に重点を置いていたが、時代が下るにつれて説明が長くなり、絵と文が半々の割合になる。絵入り事典は、当時の啓蒙書の代表であり、広い読者層を射程に出版されていたと考えられる。それが学問性を増していくのは、それだけ江戸後期において庶民の識字率と知識欲が向上したからだと理解できる。

この「図彙」の中でも、『名物図会』『名産図会』のいずれにも接点を持つ『人倫訓蒙図彙』が注意を引く。『人倫訓蒙図彙』（七巻）は、著者は未詳だが、絵は蒔絵師源三郎による上質なもので、紙面の下半部をうめている。[61] 広範囲の職業・身分を取り上げ、その業の起こりや当代の名人などに言及し、絵には職人の独特なしぐさや道具が描かれている。また、女性と男性の間の役割分担、産地や品質に言及するなど、『名物図会』との共通点が目立つ。だが、『人倫訓蒙図彙』の扱っている主題が主に京及び近畿を舞台にしている点において、違いがある（図1）。

同じ絵入り本で十八世紀を通じて出版が絶えなかったのが地誌類である。日本における地誌の編纂は古代に遡るが、江戸時代になると、「名所記」「独案内」「巡り」「巡覧記」「行程記」「道中記」等のことばを題名に含む書物が急増する。そのなかでも、とりわけ大きな反響を呼んだのが秋里籬島の『都名所図会』（一七八〇）に始まる「名所図会」類である。[62] 「名所図会」類の人気の理由の一つは、その

図1　『人倫訓蒙図彙』（1690）巻之五（細工人之部）　国立国会図書館蔵

特色ある見開きの絵で、絵師及び作者が現地に赴き、見聞きした材料をもとに描かれたとされる。[63] この絵が中心的役割を担っていることは、「名所図会」類が画工の名を記している点からも明らかである。

「名所図会」類の人気のもう一つの理由は、従来の名所案内が文芸的であったのに対して、実用性を重視している点である。藤川玲満は以下のように秋里籬島の著述の特徴をまとめている。少し長いが、参考になるので、引用しておく。

『都名所図会』と『拾遺都名所図会』は情緒的・主観的に名所を紹介した書物ではなく、『山州名跡志』をはじめとして『山城四季物語』『山代名勝志』、『祇園会細記』などの先行する地誌や年中行事案内をもとに、正確で実用的、詳細にわたる情報をその中心に据えている。多種類の書物から萬集した内容を新たな解説記事に再構築し、平明に著す編集工程が、その著述の要であった。籬島自身によって付加された事柄としては、実地調査に拠った民間風俗や景観を模写した文章や、狂歌、俳諧、挿画がある。俳諧は、典拠となった先行書物にはないものであり、籬島独自の文章や自詠の俳諧、狂歌によって文学性や娯楽性がもたらされている。[64]

『都名所図会』『拾遺都名所図会』に始まる一連の「名所図会」の

刊行は、京の書肆の功績であり、その目をみはる成功は、当時の出版界に大きな衝撃を与えた。[65] だが、この栄光は長続きせず、文化初年（一八〇四）以降「名所図会」類は大坂の出版界の「名物」となっていく。これは、河内屋太助という大坂の本屋がその板木をすべて買い取ったことに始まる。そして、大坂の書肆はその勢いで、新たな「名所図会」の出版にも乗り出し、[66] 木村兼葭堂発案の『唐土名勝図会』のような、前例のない企画にも手を染めるようになる。

今田洋三の調査によれば、大坂出版界はすでに享保―天明期（一七一六―一七八九）から日常実用書、基礎的な学問教養書、浄瑠璃本といった庶民向きの本を出して、その独自性を発揮していた。[67] 十八世紀を通じて、出版の中心が上方から江戸に移行したとするのが通説だが、大坂の書肆の活動を見る限り、低下しているとはいえない。むしろ、寛政―文化期（一七八九―一八一八）には、以前にも増して活発に動いている。河内屋による「名所図会」類の板木の購入も、その一つの現れである。この時期の大坂の書肆の活動を考える際、この地における絵師の存在を見逃すわけにはいかない。

「名所図会」の人気がその挿絵に大きく依存していることはすでに述べた。大坂の書肆が「名所図会」類の板木を手に入れようとしたのは、当時の大坂画壇の未曾有の繁栄と関係している。そもそも、『都名所図会』に始まる「名所図会」類の挿絵は、竹原春朝斎という大坂の絵師の業績であった。当時、大坂には、竹原春朝斎以外にも多くの優れた絵師が集まっており、蔀関月の場合もそうであるように、これらの画人にとって、版本の挿絵を描くことは、安定した収入源を確保することを意味した。例えば、蔀関月、中井藍江、岡田玉山（一七三七―一八一二）、[68] 丹羽桃渓（一七六〇―一八二二）[69] など、いずれも名高い浮世絵師でありながら、一方では大坂の書肆に協力して、多くの挿絵を手がけている。この時期の大坂のベストセラーが、多く絵入本である点からも、この密接な関係がうかがえる。さらに今田洋三は、もう一つの大坂の出版の新動向として、物産や農業に関わる絵入本を挙げている。宝暦四年（一七五四）刊の『名物図会』はその先がけで、寛政期になると、『名産図会』に前後して、『紙漉重宝記』（寛政十年刊）や『養蚕秘録』（享和三年刊）などが世にでている。少し後になるが、大蔵永常（一七六八―一八六一）の農書も、この流れに位置する。[70]

以上の分析からわかることは、一方では『名産図会』が、「名所図会」類のノウハウにならって、先行する地誌、図会類、あるいは本草書類などから情報を集め、それに実地調査の結果と優れた挿絵を加えて作成された可能性が高いこと。他方、この企画が大坂の書肆が特に関与した書物の類に属していたことである。

以下、『名産図会』の内容を『名物図会』との比較を通して具体的に見ていきたい。

8．『名物図会』の内容

『名物図会』と『名産図会』はともに産物に対する好奇心を前提にしながら、一歩進んで、生産の現場に着目し、その光景を絵にし、説明を加えているところに特徴がある。

しかし、名産の数は限りなく、一部の書物では紹介し尽くせないという問題があり、平瀬徹斎は早い時期から名産の選択に苦労し、「続編」を計画せざるを得なかった。では『名物図会』における物産は、何を基準に選ばれたのであろうか。

『名物図会』は八十余りの項目を設けている。各項目は、見開きで、絵図を中心に据え、右端に簡単な説明（四～六行）を添える形になっている。項目の順序には、明白な論理は見受けられないが、巻之一・巻之二では山間部の産物が中心であり、巻之五は川辺と海浜のそれに当てられている。鉱山、鯨、柿、茶などは、紙面を増やして、説明を詳しくしている（表1の総目録参照）。

とりわけ、鉱山には巻之一全巻が当てられ、実に豊かな内容となっている（図2）。鉱山の開発、発掘作業、男女間の役割分担、銀銅鉄の生産工程・生産道具・専門用語、または鉱山町の商いや行事などが紹介されている。絵は「現場」の光景を描き、各作業者（「下財（げざい）」と呼ばれる）[71]の姿、道具や装置を丁寧に描いている。それが忠実であるかどうかは問題として残るが、現場の雰囲気、時には、労働の苦難をも伝えている。著者は、低賃金の「下財」に同情まで示している。

> 金山の下財辛苦して宝をほり出しての世わたり、唯おのれが口を養ふのみ。多分の利は皆金山司の徳用となれり。[72]

ただ、その説明から、実際の工程が想像、理解できるかというと、必ずしもそうではない。実際、鉱山の巻では、工程の説明にはあまり気を配っていない。「南蛮鞴（なんばんぶき）」という項目では、「なんばんぶきは、たたらかべに、つけはぐちをして二てうふいごにてふくなり」とだけ記し、「鉄踏鞴（てつのたたら）」という項目では、「鉄をふくに、ふいごにては、湯になりがたし。ゆえにたたらにかけて湯にわかすなり」と述べるだけで、専門用語と思われる「ふいご」や「たたら」に対して説明らしいものは加えていない。その代わり、図においては「たたらかべ」「二てうふいご」「つけはぐち」というキャプションを入れ込んで、作業を描いており（図2）、「鉄踏鞴」の図では、たたらを六人の「下財」が動かしているところを描いている（図3）。すなわち、少なくとも鉱山の項目では、ある程度の予備知識を前提にして、生産の道具や装置が、実際にどのように利用されているのかを見せるのが主な目的になっている。言い換えれば、状況の理解は、絵図に

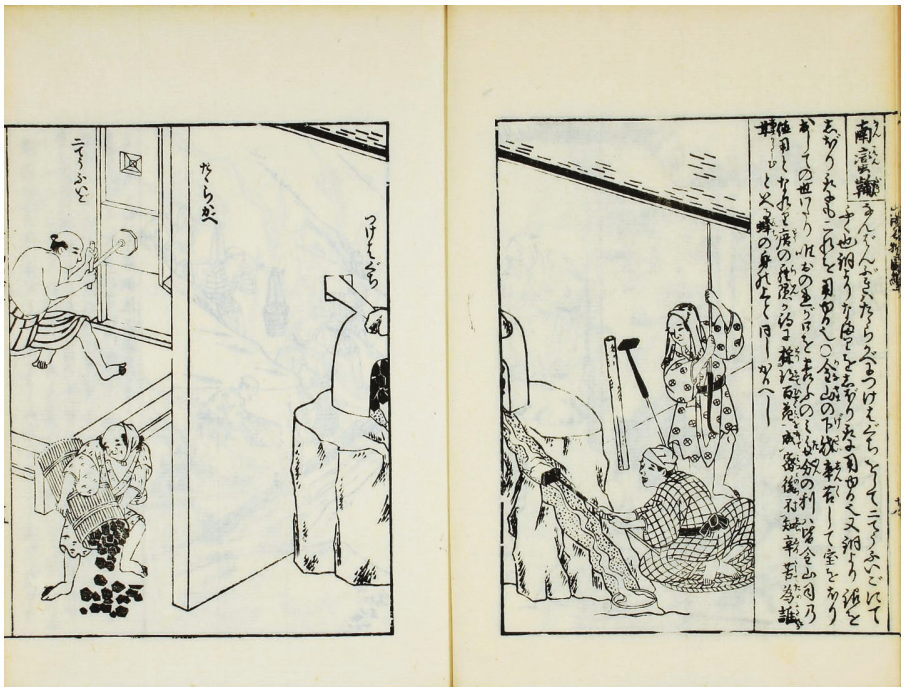

図2　『日本山海名物図会』（1754）巻之一　「南蛮鞴なんばんぶき」　早稲田大学図書館蔵

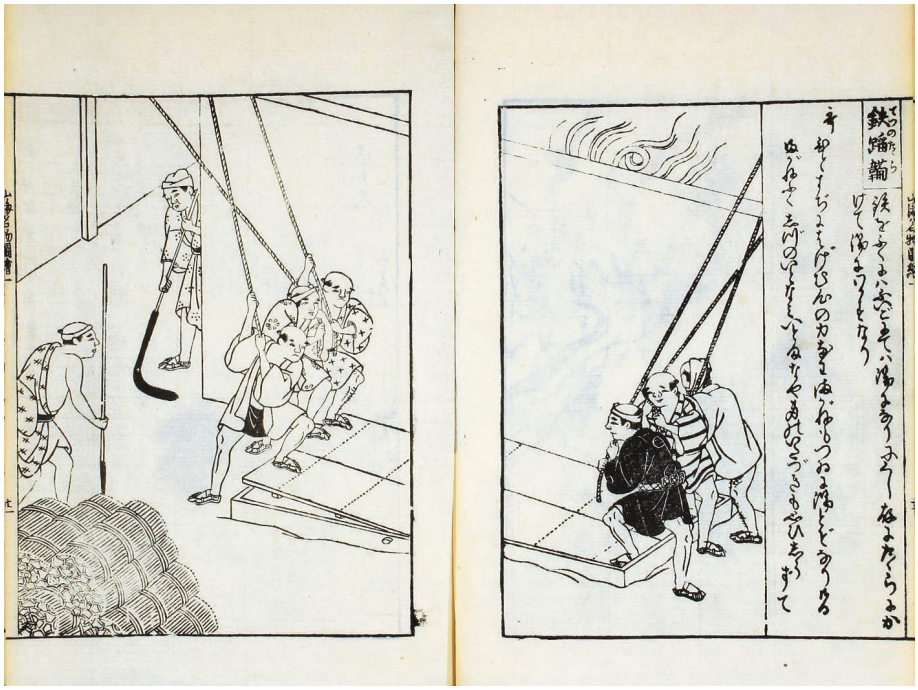

図3　『日本山海名物図会』（1754）巻之一　「鉄踏鞴てつのたたら」　早稲田大学図書館蔵

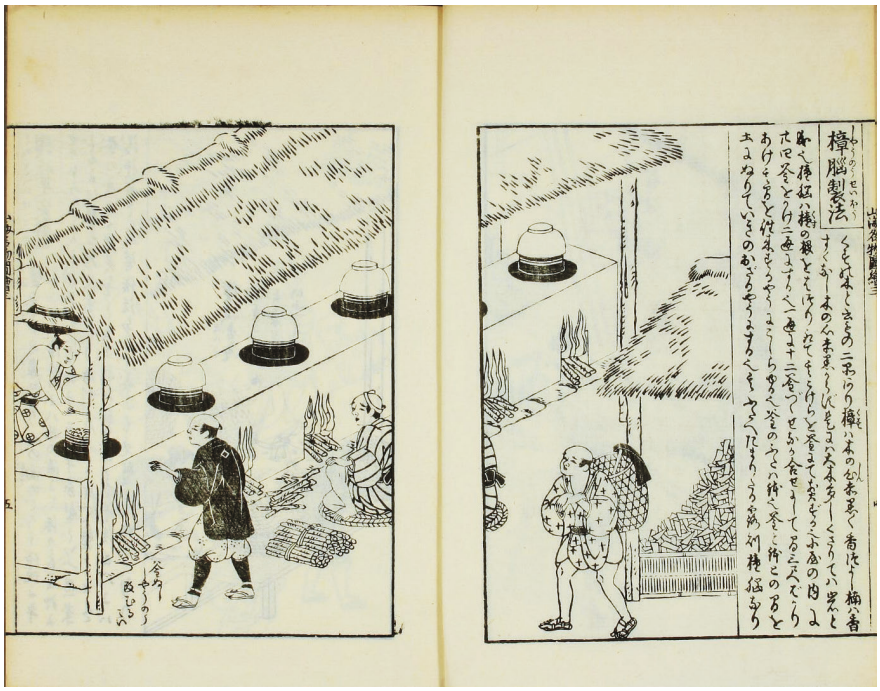

図4　『日本山海名物図会』（1754）巻之三　「樟脳製法」　早稲田大学図書館蔵

大きく依っているのである。

では、読者は予備知識を、どのような書物に求めたのだろうか。有力な候補として、『和漢三才図会』が挙げられる。[73]『和漢三才図会』（巻第二十四）には、「百工具」「鞴（ふいご）」「踏鞴（たたら）」などの項目があり、それらにはすべて、絵が添えられているし、「金類」（巻第五十九）では、「金」「銀」「銅」「鉛」「錫」などの項目があり、そこでは生産工程も含めて、詳しい説明が中国・日本の書物をもとに展開されているからである。

その生産過程が複雑である点で、鉱山の項目は、捕鯨と並んで、『名物図会』において特異な地位を占めている。他の項目の場合、予備知識は必要なく、生産の由来・技術・場所・道具・用語などがその名物に合わせて取り上げられ、地域による品質の差にも言及することがある。説明は多くの場合、具体的な数値データなどを添えて、現場の雰囲気を伝えている。例えば、「樟脳製法」の項目では、次のように記されている。

小屋の内に二十四釜をかけ、二通にするなり。一通に十二釜づつせなか合はせにして間三尺ばかりあけ、その間を往来するやうに、こしらゆるなり。釜のふたは鉢なり。釜と鉢との間を土にぬりて、いきの出ざるやうにするなり。そのふたへたまりたる露、すなはち樟脳なり。[74]（図4）

図5　『日本山海名物図会』（1754）巻之五　「鯨置網くじらおきあみ」　早稲田大学図書館蔵

この例でも明らかなように、現地で「取材」した結果を披露するのが、この図会の最大かつ唯一の目的であり、人気の理由でもあったのであろう。「取材」とは、現場で得た特殊情報を指し、絵図は、今日であれば写真が担う役割を果たしているのである。

さて、この絵が珍しく映ったことは、必ずしもその生産業が目の届かないところで行われていたことを意味しない。千葉徳爾の分析によれば、項目の約七割は近畿の産物である。[75]

捕鯨に例をとると、当時日本各地で行われていたが、とりわけ伊勢と紀伊、平戸などの捕鯨がその高度な技術によって有名だった。[76]平瀬徹斎は、熊野浦で聞き取った詳しい事情をもとに、長谷川光信に絵を描かせたと言っている。

鯨を取は、至て大ごとなり。海辺にすむ人であらざればくはしく知ることなし。予ひととせ、熊野浦にて、鯨を引よするを見て、くはしくその次第を聞置しを長谷川氏に絵にあらはさしめて、ここにのするなり。[77]

興味深いのはその一方で著者が、光信が現場に赴いて描いた絵であると強調していることである。

古来より絵に書き来るくじらは本式（ほんしき）にあらず。今図するところ

は、画工長谷川光信海辺にて真の鯨を見てその形をうつせり。もっとも正とすべし。[78]

では、当時捕鯨を描いた絵はどれだけ流布していたのだろうか。日本古典籍総合目録データベースで検索する限り、写本の形では、享保年代に作成された鯨絵、捕鯨絵が多く見受けられるが[79]、刊本の形では、まだ流通していなかったようである[80]。捕鯨の工程そのものに関しては、すでに元禄十年（一六九七）刊の『本朝食鑑』が詳しい情報を提供していた。これは、十七世紀を通じて出版された多くの食物本草書の集大成ともいえる作品で、とりわけ食用可能な動物に着目し、十二巻中八巻がこれに当てられていた。鯨に関しても、『本朝食鑑』は、現地から取り寄せた詳しい情報を多く盛り込んでいたので、これを越えるのは容易でなかった[81]。ただ、同書には挿絵がなかったので、『名物図会』がその点に目をつけたと理解できる。もっとも、ここで描かれた鯨の絵は、当時の写本の基準でも写実性に欠けており、やはり平瀬徹斎の話をもとに描かれたものと推測される（図5）。

『名物図会』で紹介されている生産業は実に多様で、農産業、水産業、加工業にまたがる多数の例が挙げられている（表1）。これに加えて、松茸市、牛市、馬市、蜜柑市、米市などの市場も紹介されている。生産の場に関しては、巻之一が鉱山に当てられていること、そして巻之五がもっぱら海・河の項目からなっていることはすでに述べたが、やはり「山」と「海」の存在は大きい。そこにこそ注目に値する生産の形態があるからだろう。農家で営まれる小規模の生産も間々見受けられるが（「伊予牛蒡」等）、一般に、数十人の男女（子供・年寄りをも含む）を動員し、それぞれの役割分担が明白であり、合理化が進んだ生産が中心になっている。当時の「名物」である以上、それが大量生産なのは当然と言えるだろう。

ここでは、水産業に例をとって、生産が動物の捕獲を必要とする場合を見ていこう。江戸時代は人口の増加に伴い、漁業が発達した時期であるが、その発達は捕獲技術の進歩に基づいている。その進歩の背景に、動物（ここでは魚）の行動に対する理解の深化があることが本書を通してうかがえる。たとえば、巻之五「八月枯鮎」を例にとると、錆鮎（秋の産卵期のアユを指す）を捕獲するには、鮎が河を下る時期（八月）を待ち、海水と河水が融合するところで、水の流れをせきとめ、竹の簀を設置し、変色した鮎がこれにはまるようにする。漁の一つのコツとして、鮎がおびえてしずんでしまわないように、音を立てずにじっとしていることを指摘する。

（…）八月の落鮎を取るには、河のながれをせきとめ、真中をあけて竹の簀を敷き、其上へ落ちくるを取るなり。此竹のすを魚梁と云ふなり。鮎は人音すれば、そこにしづみて動かず。ゆゑ

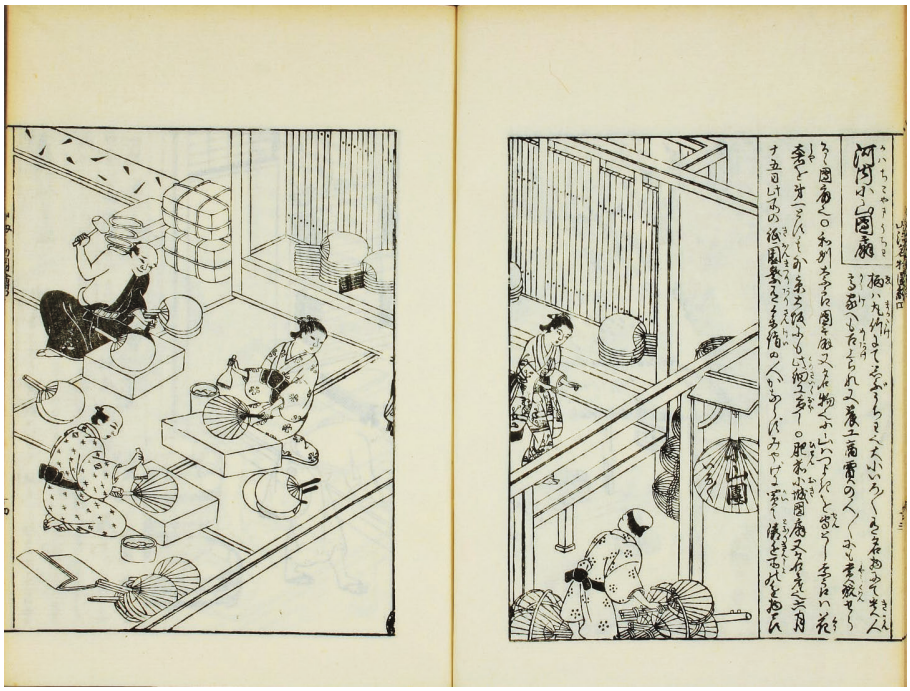

図6　『日本山海名物図会』（1754）巻之四　「河内小山団扇かはちこやまうちわ」
早稲田大学図書館蔵

にこれをとるには、静かにして人なき躰にして居る時は、鮎かならず落来るなり。[82]

この例から、魚の中国名や漁具などにも関心が向けられている点が注意される。ここでは、日本各地で採れるため鮎の産地には言及していないが、[83]他の項目では、特定の産地の名物が紹介されることがある（表1）。名物とされる理由は、主に風味だが、産物の形体が特異な場合もその評判のもととなる。日向の巨大なうなぎなどがその例である。[84]

以上の例から、『名物図会』が最新の情報を提供しているように見えて、実は先人の書をよく利用し、説明もそれと比較して簡略になっている場合があることがわかる。例えば、アユの項目の初めの三行は、『大和本草』からの抜粋である。[85]また、『本朝食鑑』における「鮎」の性質と捕獲法の説明は、『名物図会』のそれよりはるかに正確である。[86]以上、『名物図会』は何よりもその現場の雰囲気を伝える挿絵が売り物だったと考えられる。

ここで描かれている「現場」は、海辺や山中に集中している。それまでの絵入事典では職人が描かれることはあっても、市中の職人が主であったことと対照的である。また、従来の農家のイメージは理想化されたものが主流であった。[87]『名物図会』は、その点で大きな飛躍を遂げている。山村や海村のありのままの姿を伝え、それを大

坂の市場と結びつける新たな視点を示している。

最後に、長谷川光信の絵図についてだが、生産に関わる人間を中心に据え、その性別・表情・衣服・動作を重視し、それぞれの個性が表現されている点が注目される。労働に携わる人間の表情は（数少ない例を除いて）穏やかで、互いに向き合って、言葉を交わし、お互いに協力しながら作業をすすめている（図6）。その構成の上では、作業者、産物、道具、生産の現場がはっきり主題として大きく取り上げられ、「風景」というより生産の「光景」を描いているといえる。『名物図会』の絵はその点、『人倫訓蒙図彙』の流れに位置し、「名所図会」の風景画とは性格が異なるのだ。

9．『名産図会』の特徴

『名産図会』は『名物図会』の続編として企画されたものの、四十五年もの歳月が経っているため、体裁の上で多くの変化が生じている。同じ五巻でも、『名物図会』より丁数が増えている（『名物図会』の計九十四丁に対して計一五五丁）。項目数は四十六と減っているが、各項目の内容が多岐にわたり、後にも詳しく述べる通り、学問性を増している。『名物図会』において、絵が全体の七割を占めていたところ、『名産図会』では、文と絵が半々の割合になっている。また、書体（楷書体漢字平仮名交じり文）や見開きの絵図の上では、同時代の「名所図会」との共通点が目立つ。

『名産図会』の項目は、比較的整理され、幅広い産業を扱っている（表2、表4）[88]。

巻之一全巻が酒造にあてられ、五枚の挿絵を交えながら製造工程を説明している。これは他の産物にない特種な扱いで、『名産図会』を強く印象付ける効果がある。巻之二～四においては、二、三の例を除けば[89]、絵が一二枚、文は半丁から一丁の長さと、一項目は平均して短い。具体的には採掘・採取・捕獲業が主に取り上げられている。とりわけ、巻之三、四の項目は、すべて漁業（漁捕品（すなどりひん）と呼ばれる）に関連しており、この部分こそ『山海名産図会』という書名にふさわしい内容だと言える。また、ここで扱われている産物は近畿・四国・中国地方のものが圧倒的に多い[90]。それが、巻之五になると、一変し、九州や蝦夷などの遠隔地の産物が目立つ。また、「蝦夷の運上屋」、長崎における「唐船入津」「長崎唐人屋敷」「紅毛船」「菩薩（ぼさ）揚げ」（図7）などの項目は、生産の現場を扱うのではなく、海外の産物が日本に運ばれ、出荷されるまでの過程を追っている。

項目は多くの場合、以下の①、②、③からなる構成で、時に④が加わる。④は通常、項目末に位置し、巻之二～四に集中している。

① 産物名、その由来、産地、種類など、和漢の書物（本草書等）にもとづいた説明。

② 捕獲の技法、捕獲時期など、現地取材による情報

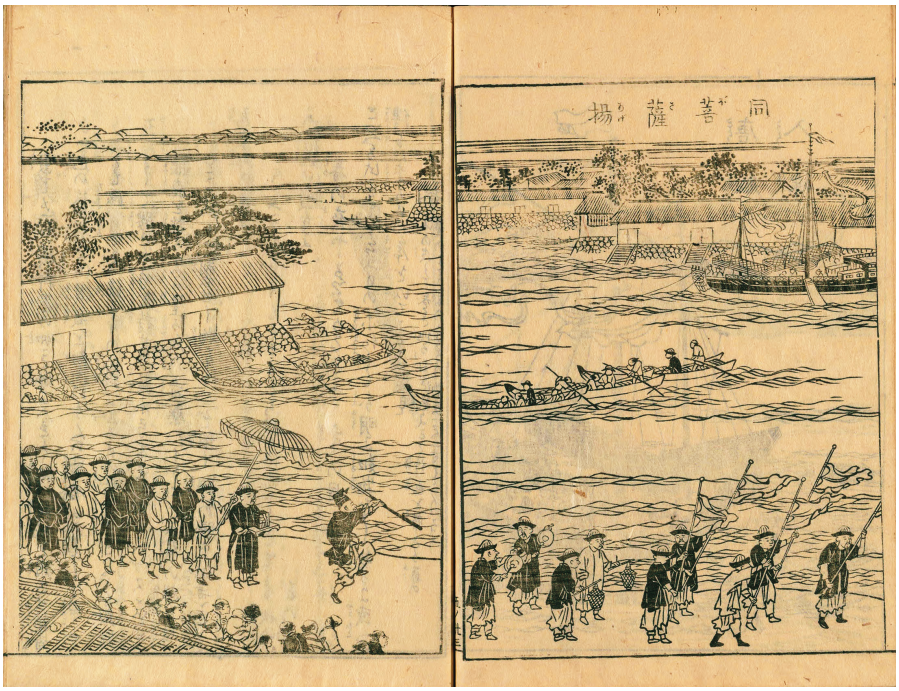

図7　『日本山海名産図会』（1799）巻之五　「同菩薩揚」　国立国会図書館蔵

③ 産物の文化的・歴史的背景（主に日本の故事を述べ、『万葉集』の和歌等を引用）

④ 段を下にずらし、小文字で、特定の話題について（物産名が主である）著者の見解を述べる。付記と記される場合がある。

『名産図会』の項目の構成は、その扱う産物によって、内容に変化があり、一定の形式にしたがっているわけではない。①では、先人の説[91]を名指しで引用することもあれば、無断に抜粋することもある。同時代の著作の場合、たいてい「或曰」、「或云」、「或書」といって、名を伏せている。また、生産過程よりも、産物名の解説に多くのスペースを当てることがある。たとえば、巻之四の「河鹿」などがそうである。この項目には①と③のみがあり、過去に「かじか」と呼ばれた動物、その声を描く歌、「諸国に河鹿という魚」を紹介し、文献的な議論にとどまっている。絵も、見開きの絵はなく、小さな挿絵が文のそばに添えられているだけである。ただし、これは『名産図会』の中では、例外的な項目で、全体においては、現地視察による説明が大部分をなす。

以下、二つの項目を中心に、『名産図会』の特徴をさらに詳しくみていきたい。

a. 酒造業へのこだわりと最新情報

巻之一は全巻にわたって、伊丹の酒造りを五枚の絵をまじえて説

明している。『名物図会』にしろ、『名産図会』にしろ、その時代の最も象徴的な産業に目をつけている。当時の産業のなかでも、特に目覚ましい発展を遂げ、大規模で多くの労力を要し、作業が細かく分担され、製造技術が定型化されつつあったものを例にとっていると言えるだろう。

「摂州伊丹酒造」と題した項目は、生産過程が主題だが、比較的長い冒頭文から始まる。そこでは『古事記』が伝える酒楽歌の故事、「サケ」という名前の由来、古歌に「味酒の三輪」と歌われる論[92]、造酒の技術の朝鮮からの伝来、近世における日本酒の卓越した地位、伊丹の酒の広範囲な評判について述べる。

これより造酒の法精細と成りて、今天下日本の酒に及ぶ物なく、これ穀気最上の御国なればなり。それが中に、摂州伊丹に醸するもの尤醇雄なりとて、普く船車に載せて台命にも応ぜり。[93]

ここでは、当時の造酒事業の繁栄を謳歌するだけでなく、酒造を古代の天皇に結びつけ、日本の文化に深く根をおろす産業であるかのように紹介している。ここで使われる「天下日本」、「穀気最上の御国」などの表現は、大坂の知識人の間で国学思想が浸透していたことをうかがわせる。

酒造りに関しては、「酒母（こうじ）」、「麹蘖（もやし）」、「酒のもと」[94]、「酘（そえ）」と区切って、製造工程を説明している。現場で観察し、当事者から得た情報と思われるものが並ぶ。たとえば、米の種類や醸具（さかどうぐ）、各段階で必要な水・麹・米の分量、時間、桶の数と寸法、そして生産のコツなどである。専門用語にも気をくばり、その意味を述べている。以下、新酒の酝[95]の製造に関する記述から数行を引用する。

定日三日前に米を出し、翌朝洗ひて漬し置き、翌朝飯に蒸て筵へあげてよく冷やし、半切八枚に配ち入るる（寒酒なれば六枚なり）。米五斗に麹一斗七升、水四斗八升を加ふ（増減家々の法あり）。半日ばかりに水の引くを期として、手をもってかきまはす、これを手元と云ふ。夜に入りて械にて摧く、これをやまおろしといふ。[96]

生産過程を描く五枚の絵図の構成には、特別な注意が払われ、現場の雰囲気を具体的に伝えている。すなわち、工場の空間、工人の姿と人数、使用道具、作業の分担、必要な労力と技能などを巧みに表現している。また、人物の仕草、動作、米や水の扱い方、工場の造り、桶の形なども具に観察している。（図8）

ここで、一つ注意すべきは、酒造法がすでに『和漢三才図会』巻之百五「造醸類」において、詳しく紹介されていることである。『和

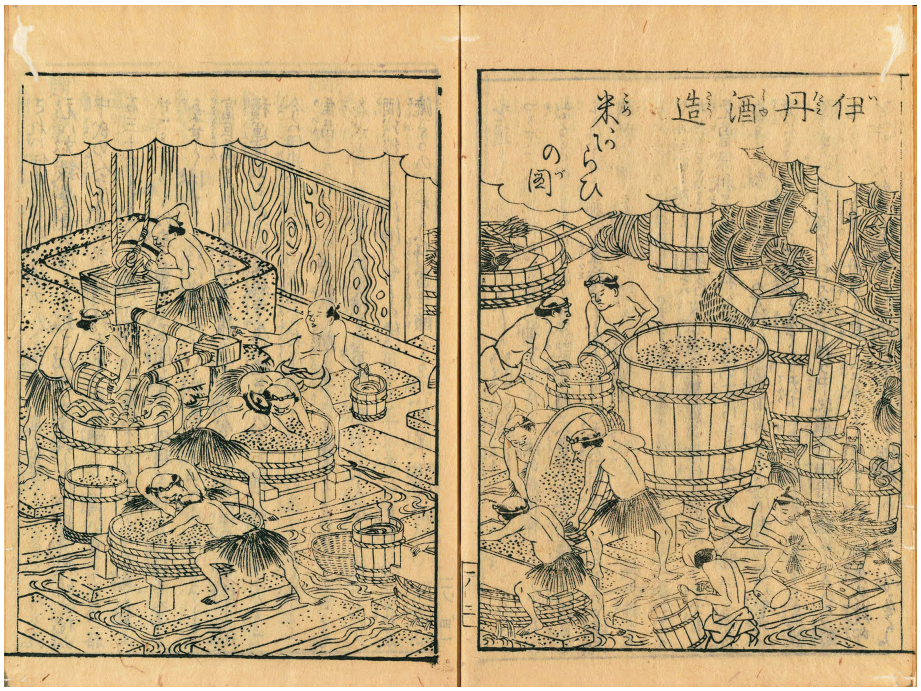

図８　『日本山海名産図会』（1799）巻之一　「伊丹酒造　米あらひの図」　国立国会図書館蔵

漢三才図会』の場合、酒の項目に続いて「醴」「屠蘇酒」「薬酒」「焼酎」「美淋酒」「醩」「糟」「麹」なども取り上げられ、酒の製造で必要となる麹や飯の炊き方も扱っているので、むしろこちらの説明の方が丁寧であるとさえいえる。『和漢三才図会』は本書で時折引用される書物なので、「酒」の項目でも参考にされたと推測できる。

同じく『名産図会』がよく利用する書に『本朝食鑑』がある。これも酒の製造法について詳しい。『名産図会』同様、各段階で利用される桶の寸法や製造の手順を詳しく述べている。造醸類は明の万暦二十三年（一五九六）刊の本草書『本草綱目』の分類の一つで、その中に「酒」という項目が含まれており、この本草学の大著を模範にしていた『本朝食鑑』や『和漢三才図会』が「酒」を取り上げるのは不思議ではない。また、当時酒は日本各地で製造されていたので、その製造法の基礎が広く共有されていたと考えられる。[97]

すると、『名産図会』における醸造法の記述の新鮮さはどこにあったのだろうか。それはおそらく①当時の最先端の技術に注目している点、②伊丹の酒造法に限定している点であると思われる。酒造の歴史について、本書は以下のように述べている。

また酒を絞りて清酒とせしハ、纔百三十年以来にて、其前ハ唯飯籮を以漉たるのみなり。[98]

すなわち、酒造は、中国から伝わった技術の中でも、とりわけ、日本で新しい進展を見たものであり、清酒などは、徳川の代になって初めて造られるようになった。清酒と言っても、多種多様で、造る時期によって、品質に差があり、値段にも影響するという。

抑、当世醸する酒は新酒（秋彼岸ころよりつくり初る）、間酒（新酒、寒前酒の間に作る）、寒前酒、寒酒（すべて日数も後程多く、あたひも次第に高し）等なり。[99]

確かに、この四種の清酒に関しては、『和漢三才図会』も『本朝食鑑』も言及していない。これだけでも、「酒」という商品が、『名産図会』の著者にとって、並大抵のものではなく、その品質に対するこだわりがあったことがわかる。『名産図会』によると、質のいい酒は日本各地で造られているが、それでも、大坂近辺（伊丹・池田、その他同国西宮・兵庫・灘・今津）[100]の酒の評判は格別である。中でも、伊丹の新酒は特に有名であることを述べ、その品質評価を披露している（「就中新酒、別して伊丹を名物として、其香芬弥妙なり」）[101]。そして本書で紹介しているのは、ある伊丹の酒屋の製造法なのである。

右の法は、伊丹郷中一家の法をあらはすのみなり。この余は家々の秘事ありて、石数・分量等各大同小異あり。（…）古今変遷、これまた云ひつくしがたし。[102]

『名産図会』における酒造の説明はとりわけ詳細で、著者が伊丹の酒造業者となんらかの繋がりを持っていたと思わせるものである。実は、この説明に利用されたと考えられる資料が現存している。伊丹の酒造家小西新右衛門一門、小西又右衛門修就による「酒造手引草」という写本で、安永九年（一七八〇）の日付を持つ。鎌谷親善の研究によれば、『名産図会』における酒の仕込み法は、この写本と多くの共通点を持ち、これが種本であったと考えられる。両者における米や水の仕込み配合、使用する道具類の呼称と数量などがほぼ一致しているところがそれを裏付けている。[103]それが種本であったと想定すると、いくつかの点が注意を引く。一つは、『名産図会』が、酒造の基礎用語である「もやし」「もと」「そえ」「おおわけ」「うんき」などに対して、種本にはない敢えて難解な文字を当てている点である。[104]これによって、『名産図会』の編者が酒造に対して特別なこだわりを示し、学問的色彩を恣意的に導入していることがわかる。もう一つは、『名産図会』において、時に重要な数値に誤記があり、説明が整合性に欠けることがある点である。[105]これらの誤記は、編者が、或いは校正者が、専門的な知識を持ち合わせていなかったか、或いは、正確にそれを伝える意志に欠けていたことを示している。とはいえ、『名産図会』が当時最先端の酒造技術を披露した点には変わり

なく、当時の読者に大いに歓迎されたに違いない。

b．「鮪」の描写にみる本草学への傾倒

『名産図会』のもっとも代表的な項目は、おそらく水産業を扱う一連の項目である。ここでは、五十行あまりという比較的長い「鮪」の項目をもとに、『名産図会』における「学問」について考えたい。シビとは、今日のマグロを指し、当時すでに全国各地で消費されていた魚である。[106]

この項目の中心をなすのは、漁の手法である。ここでは、二カ所の手法（平戸の岩清水[107]と若狭の国）に言及しているが、説明の詳しい前者のみが、現地で得た情報に基づいていると想像される。漁に使用される網の形や寸法[108]、船の種類や名前（ダンベイという小舟）、漁師が使う道具（熊手、鳶口）、餌（イワシ）、専門用語、船に乗る漁師の数、服装（腰蓑・襷・鉢巻）や動作、一網で釣れる魚の数（五～七万）などである。後にも述べるが、「鮪冬網」の図には、その手法が細部にわたって描かれている。

著者の関心は、魚自体にも注がれる。魚の形態（頭、嘴、頬、眼、鱗、腹色、尾の岐、体長、力等[109]）や習性を知ることから優れた猟獲法が導かれるという思想が、魚の項目すべてを貫いている。網の種類やその使用法は絵図や目次でも明らかなように、もっとも重きがおかれている部分である。とはいえ、魚の描写に関しては『本朝食鑑』の文章をそのまま断りなく引いているので、著者がその方面の専門家だったとはいえない。

魚の産地、捕獲時期、形態、呼称、風味、品質、また魚にまつわる故事も関心の対象になっている。『名物図会』の一部の項目は、特殊な市場に注目していたが、本書もそれにならって、物産の市場への出荷の様子に言及している。

最後に「鮪」の読みについて見解を述べている。[110]以下に見るように本草の専門的な議論になっている。

> 鮪の字をシビに充ること、其義本草[111]又字書[112]の釈義に適わず。されども和名抄は閩書に[113]よりて、魚の大小の名をも異にすること其故なきにしもあらざるべし。又日本記武烈記真鳥大臣の男の名、鮪と云に自註慈寐（シビ）とも訓せり。元より中華に海物を釈く事甚粗成るを既に云がごとし。故に姑く鮪に随て可なりともいわん。シビの訓義未詳。[114]

つまり、「鮪」を「シビ」と訓む日本の慣習は、『本草綱目』や中国の字書の説に反するものであるが、『和名抄』では、『閩書』に従って、魚の大小を分けているので、そのように訓む根拠となるのではないだろうか。『日本紀』でも、人の名前で「鮪」を「シビ」と訓んでいる例がある。中国の書物が魚介類に関しては粗雑であることは

すでに述べた。したがって、「鮪」をそのままシビと当て続けてもいいのではないだろうか。「シビ」ということばの由来ははっきりしないという。

ここで問題にされているのは、シビという名前で知られる魚に「鮪」という漢字を当てる日本人の慣習である。これが、中国の本草の大著である『本草綱目』の説明と合致しないことはすでに貝原益軒（一六三〇―一七一四）が『大和本草』で指摘しており、益軒は『本草綱目』が魚介類に関しては粗雑だとも言っている。『名産図会』の著者はこれとは違った見解を持ち、日本の古典を利用してそれを根拠づけている。まず『和名抄』という平安時代の書物を引き合いに出しているが、『和名抄』の原典を誤って明代の『閩書』としている。正しくは中国古代の字書である『爾雅』である。[115] 議論はそれほど明白ではないが、『爾雅』で大小に分けて魚を命名していることが、「鮪」と「シビ」に共通なので、同一視できると主張しているのだろう。最後に、『日本紀』においても「鮪」を「シビ」と訓んでいるので、これに従うことは間違いではなかろうと結ぶ。

このように、『名産図会』は時に本草学の細かい議論に踏み込むことがある。ここでは、『本草綱目』『和名抄』『閩書』『日本紀』などの書名を挙げているが、本書全体にわたって引用されている書物の数は五十以上にものぼり、日本の史書、歌集、本草書、中国や朝鮮の類書、医書、本草書、字書と分野も豊富である。その意味では、学問性は増しているといえるが、誤謬もあり、断りなしの引用も多く、本草の専門書とみなすことはできない。ただ、本書の編者に本草の素養があったことは間違いない。

c. 絵を通して感じとられる現場の雰囲気

最後に「鮪冬網」の絵図（図9）を考察する。これは大勢の漁師が、マグロを獲っている光景を表した典型的な風俗画である。前方には、「熊手、鳶口」を利用して、網に嵌った大きなマグロを船の中に放り込んでいる場面を、後方には大きな網を引き上げている場面を描いている。『名産図会』の絵は、風俗画の中でも上質なものを多く含んでいる。作業の内容が明確に映るよう構成を考え、細部に気をくばり、動物や人間の動作を重視し、罠や網の構造にも注意をはらっている。説明文で述べる技術、道具、動物や人間は多くの場合絵にも描かれ、文章で言い尽くせないことを絵が補う役割を果たしている。絵の補助的性格を示唆するかのように、「尚図に照らしてみるべし」と記されている。[116]

『名産図会』の絵の特徴は、現場の雰囲気に敏感な点である。風景を描き、生産作業の仕組みが把握できるように、視点の高さを調整している。「名所図会」類では、鳥瞰図が大半を占めているが、本書では、人物とほぼ同レベルに視点を置き、その仕草が身近に感じられるように工夫している。

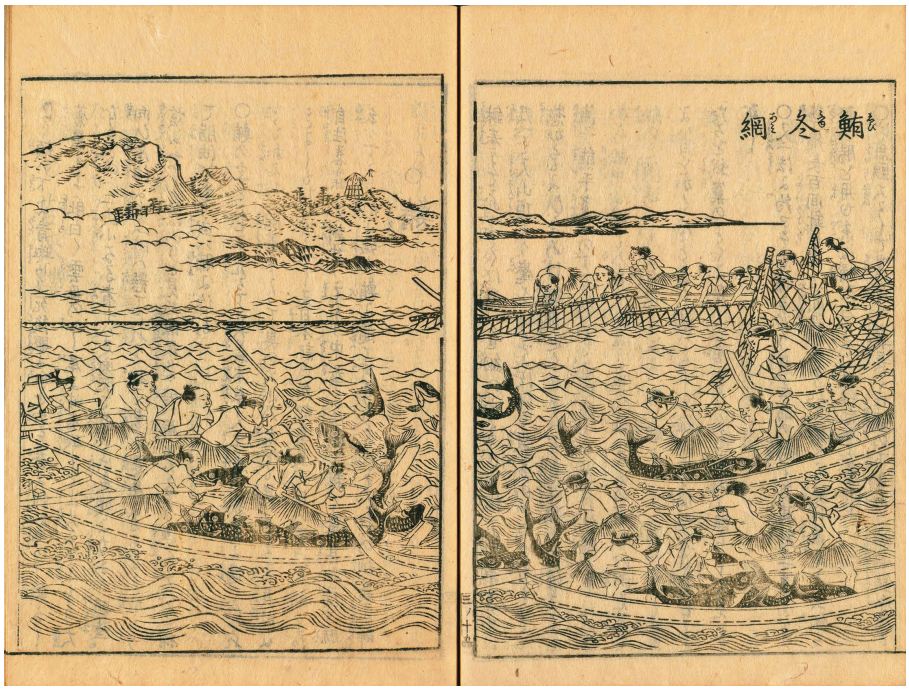

図９　『日本山海名産図会』（1799）巻之三　「鮪冬網」　国立国会図書館蔵

「鮪冬網」の場合、鮪漁が大規模な事業で、[117] 多くの労力を要し、漁師にとっては重労働であることがはっきりと絵に現れている。また『名物図会』に比べて、労働者の姿に大きな変化が起きている。大量生産によって緊張感が生じ、穏やかな表情が失われ、労働者が生産組織の一環になっている。これらの点は、この絵が現場に赴いて描かれたものであることを示唆している。関月は日本各地の生産の場を視察することによって、社会の変化を感じ取ったのではないだろうか。

10．『日本山海名産図会』の編纂について

a．遠国での取材の問題

以上、『名産図会』のいくつかの特徴をみてきたが、ここでもう一度その編纂過程について考えたい。まず『名産図会』が、北は松前から南は平戸・長崎まで、全国に渡る産物を扱っていることは、編者が当時の読者の旺盛な好奇心に力を尽くして答えようとしたことを物語っている。当時人気を博していた「名所図会」類は、一国のみを取材の対象にしていたが、それでもその制作に多くの時間と労力を費やしていたことが知られている。それを思うと、全国を視野に入れた『名産図会』がいかに膨大な労力を要する企画だったかは想像に難くない。では、編者はこの仕事をいかに遂行したのだろう

か。『名産図会』の戦略を具体的に見ていきたい。

『名産図会』が主に近畿や中国地方の産物を扱っていることはすでに述べた。遠国の産物は比較的少なく、巻之五に集中している。珍しさの点でもっとも注意を引くのは、蝦夷の「膃肭獣」、長崎の「異国産物」と肥前伊万里焼である。旅行が盛んな時代だったとはいえ、これだけ遠隔な地で取材するのは容易でなく、案内役が必要だったと考えられる。跋文でもそのことに触れている。「遠つ国のたどりかたきハ、そこのよすが、もとむなどしつつ、（…）」。また、案内役がみつからない場合は、現地に出向かずに、人を通して情報を得ることもあった。たとえば、蝦夷の場合、自分の目で確かめていないことを認めている（「右は皆、俳諧行脚の人松前往来の話に伝えききて、実に予が見及びしことにハあらず」[118]）。

蝦夷は当時、松前藩が支配する狭い土地をのぞけば国外であり、日本人はアイヌとの交易を通して産物を手に入れていた。蝦夷まで足をのばす者は少なく、この地に関する知識はけっして広く共有されていたとはいえない。『名産図会』が取り上げる産物は「膃肭獣」と「昆布」のみである。膃肭獣とはオットセイを指し、生殖器が高値で売られる薬材であったため、古くから関心が寄せられていた。『名産図会』における膃肭獣の説明は、十七世紀末・十八世紀初頭に刊行された『本朝食鑑』や『和漢三才図会』によるところが大きく、新しい情報はほとんど含まれていない。「昆布」も、『名物図会』に「松前昆布」という項目がすでにあり[119]、新鮮味はほとんどなかった。では、「俳諧行脚の人」に何を教わったのだろう。それはおそらく運上屋の配置や運営に関わる具体的な描写だろう。著者は二枚の挿絵（「蝦夷人捕膃肭」「同運上屋」）を添えている。直に見ていない光景であるにもかかわらず、現地の雰囲気をみごとに漂わせている（図10）。これを描くに、何か資料があったのだろうか。当時の出版物で蝦夷やアイヌを描いたものは少なく[120]、松前の町絵師による風俗画を手に入れた可能性もあるが確かなことは言えない[121]。

このように、現場での「取材」を編集の原則としながらも、一部の絵は、想像された光景であらざるを得なかったのである。では、なぜ無理をしてまでも、蝦夷絵を添えたのだろうか。それは、言うまでもなく蝦夷地と蝦夷人が当時強い関心の的であったからである。とりわけ大坂の町人の間では、ロシアの南進や蝦夷地に関する情報は、大いに関心を呼んでいた。木村蒹葭堂が、天明期に、当時としては珍しい蝦夷の地図を所持して、蝦夷の織物や産物の販売を上方で請け負っていたことが知られている。その後、蝦夷の探検家の最上徳内（一七五四―一八三六）等を介して、機密文書も手に入れている[122]。懐徳堂でも、蝦夷が話題になっていたことは、懐徳堂の学主をつとめ、関月と親しい間柄にあった中井竹山（一七三〇―一八〇四）が寛政三年（一七九一）に松平定信（一七五九―一八二九）に献上した『草茅危言』の中で、蝦夷人との交易や蝦夷地の開発事業に言及

図10　『日本山海名産図会』（1799）巻之五　「蝦夷人捕膃肭」　国立国会図書館蔵

している点からもあきらかである。[123]

蝦夷ほど遠国ではないが、写生のために九州まで赴くのは手間のかかる作業であった。巻之五には、「伊万里陶器」と長崎の外国船を扱う項目がある。[124] 前者は三枚の挿絵を含み、関月らしく人物と労働を中心に据えながら、生産現場を細部にわたって描いている（図11参照）。その説明においては、一方では、「上場」と言われる十八カ所の窯山の名を挙げ、その中の鍋島や平戸藩の御用山の存在に触れ（「此内大河内は鍋島の御用山、三河内は平戸の御用山にして、他に貨売することを禁ず」[125]）、現地で得たと思われる情報を盛り込んでいるが、他方、製造工程の説明において明崇禎十年（一六三七）刊『天工開物』[126]からの引用が目立ち、現場で得た情報は限られていたと思わせる。とりわけ、当時最先端の技術であった赤絵については、「是一山の秘術として口外を禁ず。故に此に略す」として、詳しい説明を避けている。この例からも、現地取材の難しさが察知できる。絵師が現場に赴いて写生に成功し、物産に関する情報を多少手に入れたとしても、工程作業を理解したことにはならず、説明文は後になって資料や文献に基づいて書かれたと想定できるのである。

もう一つ注意を要する点は、挿絵が生産の光景を表すといっても、いくらかの人為的技巧を凝らしていることである。たとえば、図11の場合、見開きの絵に三つの作業を閉じ込めているが、それは実際には数カ所で行われていたものだと想像できる。このような技巧は、

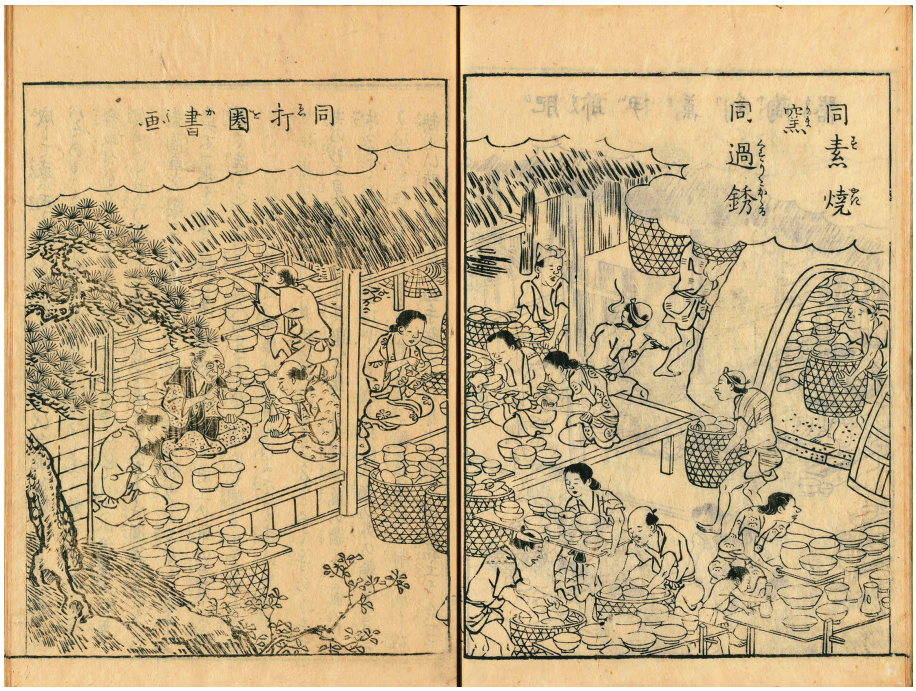

図11　『日本山海名産図会』（1799）巻之五　「同素焼釜すやきがま、同過銹くすりをかくる、同打圏書画ゑをかく」　国立国会図書館蔵

『名産図会』の絵の「写実性」を考える上で考慮すべき点である。

では、長崎の場合はどうであろう。十八世紀の後半ともなると、多くの学者や画人が長崎に出かけたことは良く知られている。大坂は、長崎に向かう旅人の通り道に位置し、長崎に関する情報が容易に手に入るところであった。蔀関月の近辺では、木村兼葭堂が安永七年（一七七八）に長崎に遊んでいるし、司馬江漢（一七四七―一八一八）も天明八年（一七八八）に一年がかりで長崎・平戸・生月島等を巡り、数年後にその記録を『西遊旅譚』（一八〇三）として発表し、道中に描いた絵を披露している。これに加えて、長崎で販売されていた「異国人」や「異国船」を描いた版画が大坂でも人の目に触れるようになったとも十分考えられる。たとえば、『紅毛船』、『紅毛船入津』、『菩薩揚げ』などは長崎版画の典型的な素材だった[127]。長崎版画は十八世紀の半ばに勃興し、初期のものはさほど写実的ではなかったが、十九世に入って技術的に大きく進展したとされる[128]。しかし、版画が現場を想像するに役立ったにせよ、それだけで現状を把握することは難しかったであろう。

『名産図会』の解説は、オランダ船と唐船の入津に的を絞っており、長崎の地理や、現地の人員の対応に詳しく、さらに風俗画を五枚も含んでいる（図7）。関月の他の絵に比べて、やや題材との距離が遠いように思えるが、現場における行動の制限がそのように影響したのかもしれない。絵の内容は詳細で、現地で写生したと思わせるも

のである。

では当時、長崎に関する情報はどれだけ流布していたのだろう。上方で刊行されていた絵入りの長崎の地誌としては、元禄一七（一七〇四）年刊『長崎虫眼鏡』と寛政十二（一八〇〇）年刊『長崎聞見録』が挙げられる。前者は、絵も文も、なんらかの資料をもとに作成されたと考えられ、過去のできごとに多く言及し、現地の雰囲気を伝えるものではない。後者の出版は、『名産図会』より後になるが、序文の日付は寛政十年なので同時代の作品と考えてよいだろう。「唐船」「唐船の略図」「舟揚りの図・船菩薩の事」「唐人舘」「阿蘭陀屋鋪」「阿蘭陀船の事」「阿蘭陀船の図」など、取り上げている題材は『名産図会』とあまり違わない。『長崎聞見録』は、長崎の風物や

図12 『長崎聞見録』（1800）巻之二「舟揚りの図」 早稲田大学図書館蔵

動植物に重点を置いているわりには、情報量が少なく、絵も雑である（図12）。その点、『名産図会』は、当時類例を見ない画質の高さと、具体的な情報を提供していたといえる。それが長崎で直接得たものでなかったにしても、絵師の技量と情報収集力の点で、『名産図会』は際立つ存在だったと言える。

b. 関月の写生に対する姿勢

以上見てきたように、『名産図会』には、大まかに二種類の絵が混在している。資料をもとに想像したものと現場の光景を忠実に伝えるものである。ただし、後者の中には、編集の都合上、ある程度体裁を繕ったものも含まれている。この二種類の絵を区別するのは決して容易ではない。しかし、『名産図会』がいかに想像に基づく絵を含んでいたとしても、蔀関月が絵師として、現物に即して絵を描き続けることにこだわっていたのは確かだ。晩年、関月と親しい間柄であった秦石田が『伊勢参宮名所図会』の跋文においてそれをはっきり語っている。

山に海におのづからのありさまを師とし、うつさんこそ、こよなきまなびならめ、これいにしへによるべきことわりにして、まなびに心をつくすもの、しかあらざらんやは。[129]

すなわち、絵師にとって、自然をありのままに写すことこそが、一番の学びであり、それは古くから伝わる教えである。絵を志すものはこれに従うべきである。関月はこの理想に異常なまでに忠実で、その風景の描写に対する執着こそが彼の名声のもとにあるという。

我が友関月こそ、それを我が病ひとなしけれ。さて身は心にまかせぬれば、草枕旅の硯の海をわたり、あしひきの山に筆のはやしのこずゑをつぶね、あるは岩のはざまにおりゐて、淵にのぞむ水の色までも、藍より出でてなほこさまさる名は流れき。[130]

ここで強調されているのは、関月の絵師としての志が並大抵のものではなく、実物に即して絵を描くという姿勢を何よりも重視していた点である。この姿勢は当時の絵師の教育によるもので広く共有されたものであろうが、「名所図会」の商業的人気がこの絵師としての視線を写生画に向けさせたともいえる。

c.『名産図会』の学問性

『名産図会』の学問性が『名物図会』に比べて濃厚になっていることはすでに述べたが、その性格をもう少し具体的に見ていきたい。『名産図会』の項目の内容は、産物によって特色はあるが、たいてい次の様式にしたがっている。まず、①産地・出荷・品質上の序列をとりあげ、②採取法・捕獲法・加工法を説明し、③動物／植物の種別・形態・古名に言及する。時折、最後に、「附記」として、著者の見解が記されていることもある。

巻之四「八目鰻（やつめうなぎ）」という項目では、この「附記」は本文以上に長い。本文では、ヤツメウナギの産地と漁法について述べるが、「附記」では全くこれとは違った本草の問題を扱う。すでに見た「鮪」の読みの問題と共通点がある。ここでは、本草の古典である『本草綱目』で取り上げられている「鱧（れい）」という魚と八目鰻を同一視すべきかが議論され、著者はそうすべきではないと主張する。『本朝食鑑』や『本草綱目』での近来南部で釣られた魚の話を引き合いに出し、「鱧（れい）」と八目鰻を同じ魚とする説を否定している。以下、結びの部分を引用する。

案ずるに『本草（綱目）』の鱧（れい）の条下に疳疾（かんしつ）を療（りょう）ずることを載（のせ）（載）ざれば、鱧は鱧にして、此の八目鰻と別物なる事明（あきらか）なり。又『（本朝）食鑑』に云ところハ、疳疾の薬に充（あ）てて、この八目鰻なること疑いなくいいて、鱧の字に充（あて）たるは誤なるべし。所詮今の八目鰻疳疾の薬用にだにあたらば、漢名の論は無用なるべし。[131]

明晰な論理だとは言えないが、要するに、『本草綱目』では「鱧」

の薬用に言及していないのに、『本朝食鑑』では「八目鰻」は食用には向かず、薬用のみに採られていると言っているので、同じ魚とするのは誤りであり、漢名を論じるべきではないと結んでいるのである。

このような議論は、当時の本草学の領域に入るので、木村兼葭堂が序文で本草学の書物のように扱っているのも一理ある。『名産図会』は、とりわけ魚介類となると上記①と③の部分において、頻繁に『大和本草』『本朝食鑑』、あるいは『和漢三才図会』を引用し、その説を議論したりしている。そして、これら三書はいずれも明の『本草綱目』の系譜上に位置している。[132]

『本草綱目』は、その知識のスケールにおいて、またはその体系の上でも、本草の集大成とみなされ、中国だけでなく、広く東アジア諸国において経典視されてきた。日本でも、十七世紀を通じて広く読まれたが、十七世紀末・十八世紀初頭になると、この「経典」を利用しながらも、日本の産物を取り上げた本草書、事典類（類書）が現れ、『大和本草』『本朝食鑑』『和漢三才図会』は、その中でも特に優れた刊行物だった。本草というと通常、薬材を連想するが、実は『本草綱目』は人間に有用な自然物も対象とし、また、それを加工して得た物にまでも言及しているので、『名産図会』で扱う産物のほとんどが、本草書との関連で議論されることは、無理もないことだった。ただ『本草綱目』は、産物を対象にしても、生産の過程（採取法、捕獲法、加工法）に言及することはあまりしなかった。その点、『本朝食鑑』と『和漢三才図会』はその方面に対する関心をはっきり示し、当事者から得た情報を盛り込んだ説明に多くの紙面を割いている。その意味で、木村兼葭堂の序文が明示していたように、『名産図会』の編述は先人の本草書の系譜に位置していると言える。

この中国に発する学問的系譜を考えるとき、もう一つ注意すべき点がある。『名産図会』の巻之五では、本草書では扱われていない項目として、(1)「近江石灰（おおみいしばい）」、(2)「越後織布（えちごぬの）」と(3)「伊萬里陶器（いまりやき）」があるが、この(1)と(3)では、同じく明末に出版された『天工開物』を参考にしており、その引用が著しい。[133]『天工開物』は中国在来の技術を各方面にわたって網羅しているとされる珍しい事典である。[134]産業を十八部門に分け、自らの見聞をもとに、数値データを加えながら、絵入りの説明を提供している。この著作は本国では広く流布した形跡はないが、日本では、十七世紀末にすでに輸入され、知識層の目にとまり、一七七一年に和刻本が大坂の書肆によって出版されている。興味深いことに、木村兼葭堂所蔵本がこの和刻本の底本になっている。[135]『天工開物』の挿絵は、初版においてはかなり素朴なものだったが（図13）、それでも絵によって生産の場を描く試みの斬新さは注目を浴び、一部の本草学者に強い印象を与えた。たとえば、平賀源内（一七二八―一七八〇）が、『物類品隲（ぶつるいひんしつ）』の巻之六「甘藷培養并製造法」において、『天工開物』の絵をほとんど手を入れずに写し

図13 『天工開物』（1637）第七巻「陶埏」白磁 付青磁　国立国会図書館蔵

ていることはよく知られている。[136]

『名産図会』において、『天工開物』が名指しで引用されている項目は「伊萬里陶器」のみである。すでに述べたように、「伊萬里陶器」の挿絵は、現地で写生したと思わせる内容のものであるが、その生産工程の説明に、『天工開物』の「陶埏」から部分的に引用している。それは正確には引用ではなく、ところどころ文章や表現を借りて説明しているといったほうが正しい。そのためか、難解あるいは不自然な漢字や表現が目立つ。たとえば、「造瓷坏器」という欄において、型で成形した磁器を「印器」と呼び、「瓶」「甕」「爐合」や「屏風」「燭基」の例などをあげているが、その用語にしても、漢字にしても、当時現場で使用されていたものとは思えない。[137] また、引用が不完全である場合もある。「無名異」という色釉の材料に上中下の品があるといい、それぞれから得る色を説明する際、上と中のみを取り上げ、下はない。[138] 校正のミスだといえるが、著者の書いた文章でないことから、このようなミスが起こると解釈できる。また『天工開物』は磁器の生産工程を複数の挿絵によって描いている。『名産図会』の挿絵の方が優れているが、取り上げる作業は共通している。このように見ていくと『天工開物』の影響は見逃せない。名指しで引用されているのは本書全体で一カ所のみだが、実はこれが下敷きになっているところはるかに多いのではないか。

すでに述べたように「近江石灰」の項目も『天工開物』の引用を

含むが、『名産図会』と『天工開物』が共に取り上げている物産はこの二つに限らない（表5）。なるほど「石灰」の例をのぞいて、説明の文章上での一致は皆無に等しいが、『天工開物』を参考にしていることは全体の構成から見て取れる。『天工開物』「麴蘖（こうじもやし）」の冒頭で聖人と酒を結びつけているのに対して、『名産図会』では「酒造」の冒頭で酒は古くから神に捧げられてきたと言う。また、生産工程の説明の仕方においても、多くの示唆を得ていると思われる。たとえば『名産図会』の特徴として挙げた産地、用語、道具、作業者の動作に対する関心などは、いずれも『天工開物』と共通している。このように見ていくと、『名産図会』の発想そのものの起源が『天工開物』にあるとさえ考えられるのである。また、さらに推論を進めて、すでに『名物図会』においても、同じことが言える。ただ、『名産図会』の蜂蜜や酒造の例からも明らかなように、他の著書（『和漢三才図会』など）や現地で得た情報も参考にしているので、この系譜が目立たなくなっているのである。

以上、『名産図会』が『本草綱目』や『天工開物』の系統に位置する書物であることを強調したが、一方で、日本の古典からも多く引用している点にも注意すべきである。日本の本草書では多く『日本書紀』、『万葉集』、『延喜式』や『和名抄』などの書物を参考にするが、『名産図会』においては、それに加えて和歌の引用が目立つ。たとえば、巻之三「真珠」の附記などは、『新猿楽記』、『万葉集』、『古今和歌六帖』、『西行山家集』などを引用して、アコヤという貝の由来を考えている。[139] 和歌を多く盛り込むことは、当時のベストセラーであった「名所図会」を思わせ、難解な漢字が与える印象を和らげるねらいがあったのかもしれない。

上記の考察をもとに、『名産図会』の学問性についてまとめると、まずこれが本草の系譜に位置する和漢の書物を幅広く利用しながら編纂され、その発想において、『天工開物』から多くの示唆を得ていることが判明した。『天工開物』が生産技術を詳細に説明する中国の歴史でも稀な書物であることに鑑みると、博学な人物が本書の編纂に当たったと考えられる。しかし、ここで引用される書物は、『天工開物』も含めて、全て刊本だったので、凡人の手に届かない稀覯本であったわけではない。木村兼葭堂は序文において、本書の文が「事実之証拠」に及んでいることを評価しているが、確かに文面には「案ずるに」で始まる著者の議論が散見する。これは、著者が本草の道における権威であったことを思わせる。一方、議論の立て方は必ずしも明晰でなく、校正ミスが目立ち、当時の学問水準に照らすとやや劣るようにも見える。[140]

『名産図会』の制作に複数の人物が関わっていることはすでに述べたが、では、この学問的な性格は誰によるものだろうか。この企画の立案者であった平瀬補世については、書肆であったこと以外、何も知られていない。本草に対する関心は、その父徹斎の作品であ

る『名物図会』においてすでに顕著であった。また、『名物図会』が鉱業に一章を当て、細かに解説している点は、すでに徹斎の眼中に『天工開物』があったことを物語っている。[141] 十八世紀後半になると、本草や物産が広く庶民の関心の対象となり、趣味でその方面の知識を深く学ぶ人物がいたとしてもおかしくなく、補世が父にならってその分野に詳しかったと想定できる。一般に当時の大坂の書肆が多く執筆活動に携わる知識人であったことは調査によってわかっており、[142] 木村蒹葭堂の家を訪問していた書肆の数からも察することができる。[143] これは元来、平瀬徹斎と同じ書肆の身分であった蔀関月についても言えることで、懐徳堂の文人や木村蒹葭堂と交流があった彼が、本草への関心も共有していた可能性は十分にあり、画人としてそのような知識を必要としていたとも考えられる。[144] また、本書の編纂に最後に加わった秦石田がこの方面に詳しかったとする仮説も十分成りたち、むしろこちらの方が有力である。まず、『名産図会』の跋文の署名に「海驢」の古名の「ミチ」を利用している点が注意を引く。また、『伊勢参宮名所図会』の跋文に多くの植物名が散りばめられているのも本草に対する好奇心が人一倍であったことを示している。[145]

秦石田が、本草の専門的知識を多く持ち合わせた人物だとしても、それは当時流布していた刊本から得たもので、最先端の知識でなかった可能性がある。一方、木村蒹葭堂がこの企画に関与したと想定することにも、それなりの根拠がある。すなわち、①木村蒹葭堂が本草・物産方面において、広範な知識の持ち主であり、序文でも述べている通り、その知識を文章にしていた。②長崎と蝦夷の産物に関して最新の情報を収集していた。③『天工開物』を家蔵しており、その内容に通じていた。④関月没後、『名産図会』の編纂を引き受けた中井藍江と秦石田の知人であった、という四点である。[146]

11. 結びにかえて
――『日本山海名産図会』における物産学の系譜

では、最後に、『名産図会』が十八世紀末の文化のどのような動向を伝えているか、まとめてみたい。まず、本書は大坂の書肆の野心と行動力の成果だといえる。『名産図会』は、平瀬徹斎（千草屋新右衛門）という書肆が宝暦期に企てた産物案内書『日本山海名物図会』の延長線上に位置する。『名物図会』は、その発想、体裁、視察の範囲、内容の豊かさの上で画期的な作品であった。平瀬徹斎は、書肆として、これが発展性のある書物だと判断し、早期から「続編」を計画したが、達成に至らなかった。この企画はその息子の鬼望（別名補世）に受け継がれ、千種屋と密接な関係にあった蔀関月という優れた絵師の力を借りて、寛政年間にほぼ結実し、寛政七年に大坂の本屋仲間に開板願いが届けられた。しかし、この時には、すで

に補世は他界しており、関月が出版の責任を一人で担う身となっていた。結局『名産図会』が上梓されないうちに関月も亡くなり、板も千種屋の手を離れた。関月亡き後、出版計画は危機に直面するが、弟子の藍江と秦石田による増訂を経て日の目を見ることになる。

現存する『名産図会』には、画工の名前のみが明記されている。絵と文を区別して考えると、まず本書の七十枚以上の見開きの絵はほぼすべて蔀関月によるものと考えられる。数枚を除けば、すべて生産現場に着目し、その光景を細部にわたって伝えている。これこそが蔀関月がもっとも伝えようとした主題であるといえる。その絵の一部が現地での写生でなかったにせよ、当時の大坂画壇の第一人者だけあって、彼の筆による挿絵は、十八世紀末の海村や山村の繁栄をみごとに表すと同時に、大量生産が導く労働の変容をも示している。

『名産図会』の文は、全体において統一性に欠け、複雑な経緯によってできあがったものであることを感じさせる。どの部分が、いつ、誰によって書かれたかは判断しがたい。[147] 項目には共通の設定が見られるが、現地取材、漢籍、和本、伝聞と情報源が複数あり、項目によって、その利用の度合いが違う。それでも、挿絵と説明文がうまく対応しているところから、編者の役割が大きかったことが推測できる。このような複雑な経緯にも関わらず、この本が世に出されたのは、書肆の強い意志とともに、大坂の文芸界の結束に支えられていたからであろう。

刊行された『名産図会』は七十枚の優れた風俗画を含む、計百五十五丁、五巻本の大部である。その書体、見開きの絵や現地視察の重視などは、当時出版界を席巻していた「名所図会」と類似するが、相違する点もある。その一つは、一定の地域の文化の歴史や記憶を辿るのではなく、日本各地の海浜や山間における生産に焦点を当てていることである。もう一つの違いは、解説が和歌や俳諧よりも、明代の『本草綱目』や『天工開物』から発展した本草・物産の学問にもとづいている点である。この傾向はすでに『名物図会』にも見受けられたが、『名産図会』において、その学問性はさらに顕著になっている。木村蒹葭堂の序文もその権威づけに一役買っている。この現象の背景に、大坂の書肆と文芸界の「自己主張」を見ることができる。「名所」に対して「名物」や「名産」を掲げることは、まさに生産と流通を中心に据えた新しい文化を宣伝することを意味した。そして、その新しい文化の担い手は大坂人だと主張する機会でもあったのではないか。

その文化とは、どのような知識と意識からなっていたのだろうか。まず『名物図会』と『名産図会』が必ず言及する商品の産地と品質に関する知識が含まれる。十八世紀の後半になると、上方という限られた地域の産業から日本全域の山林や海浜における産業へと視野が広がる。ここで注意すべきは、まず、この知識が「一国」という

従来の地域感から脱して、全国規模でものを捉えている点である。それに加えて、蝦夷や長崎の異国産物をも取り上げることによって、当時の日本の商業の繁栄に外国の産物が貢献していることを示している点である。また、この文化の重要な性格は、庶民が作り上げている文化であることである。庶民とは、大坂の町人を指すだけでなく、海村に住む漁師であったり、石山で石を掘る下財（げざい）であったり、熊を命がけで捕る猟師を含むのである。これら庶民の働きがあってはじめて今日の繁栄があるのだと関月の絵は語っているのである。

このように『名産図会』という書物を位置付けると、そのメッセージは明らかに町衆に宛てられたものであるが、この書物が広く流布するにあたって、その効果は大都市にとどまらず、山林や海浜で生産に携わる人間にも大きな刺激と自負心を与えたと想像できる。最後に、この書物が関月の死というできごとに直面したにもかかわらず刊行されるに至ったのは、おそらくこの「新しい文化」に対する思い入れが多くの人によって共有されていたからだと解釈できる。

付記：杏雨書屋蔵『平賀源内物産考』なる写本について

大阪の杏雨書屋に、『平賀源内物産考』と題された一冊（六十五丁）の写本（請求番号 4975）がある。黒川真頼、真道の蔵書印を持つ。[148] この写本について言及した論文は管見のかぎり皆無である。

本写本には、蔀関月の見開きの絵はないが、その内容は『名産図会』の抜粋から成っている。表6において本書の構成を示し、本書の項目がそれぞれ『名産図会』のどの項目に該当するかを記した。

本書は大きく以下のように区分することができる。

① 「序文」
② 魚と蛙の絵
③ 漁捕品（すなどりひん）の項目（一部）
④ 『名産図会』の総目次とほぼ一致する一覧表
⑤ 漁捕品（すなどりひん）の項目。あらましのみの項目が多い。
⑥ 田猟品（かりのしな）の項目

項目の順列は『名産図会』の巻内の順列と一致するが、表からもわかるように、『名産図会』の巻の順には従っていない。また、同じ魚が二度取り上げられることがあるが、その場合、一度は概要のみだったり、わずか数行だったりする。

同書が『名産図会』の写本だとすると、筆者は関心がある部分を選択し、写したことになるが、だとすると、写し方はかなり乱れている。一方、本書には、朱筆の書き入れがある。「序文」の句読点、漢字のふりがな、少数の注が朱色で付されて、書き入れはすべて『名産図会』に含まれている（図14、15）。したがって、本書は『名産図会』の完成後の写本ではなく、完成以前に存在した草稿で、書き入れは編纂者によるものだという推定も成り立つ。

以下、同写本の特徴と解説を列記する。

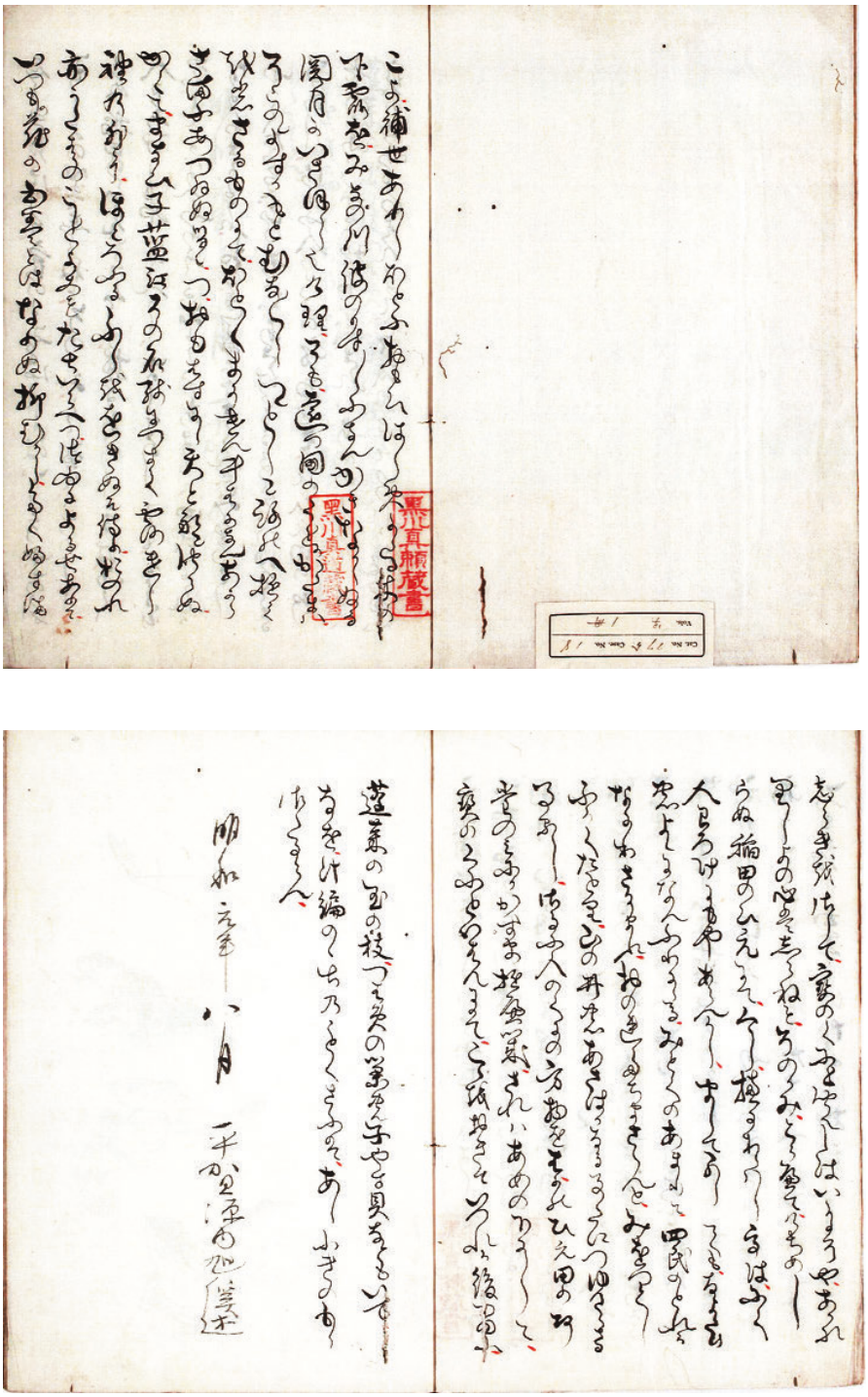

図14・15 『平賀源内物産考』（写本）の序文　武田科学振興財団 杏雨書屋所蔵

1．全体を通じて、書体に変化が認められる。「序文」は仮名で清書されている。①③⑥は細字で、④と⑤は太字で書かれている。

2．『名産図会』の題名はどこにも見当たらない。

3．「こよ、補世ありしほどにおもひはじめにたる木の下露を、…関月がいさほしなりけり」から始まる『名産図会』の跋文が、本書では「序文」であるかのように添えられている。「なにはえの、みち、しるす」の記載はなく、その代わりに、別筆で「明和元年八月、平賀源内鳩渓述」とある（図14、図15）が、それ以外、まったく同じ内容の文である。朱色で句読点が施され、『名産図会』の跋文と書体や字数の上で全く一致しているので、この「序文」だけは、本書の跋文の稿本であると解釈できる。『名産図会』の編纂に関わった人物（平瀬補世、蔀関月、中井藍江）に言及し、その著者が最後に五巻本に仕上げたことを述べているので、『名産図会』完成後に書かれた文章である。

平賀源内（一七二八―一七八〇）は周知の通り、本草・物産における最先端の知識に通じ、国の宝となる物産を求めて、日本全国を歩きまわった人物である。大坂の学者との縁も深く、木村蒹葭堂と交流があった。その点では、『名産図会』内の文章の筆者であってもおかしくない人物である。しかし、明和元年（一七六四）は、中井藍江が生まれる以前で、蔀関月もまだ年少であり、源内がこの「序文」の筆者であることは不可能である。また、世代的にも、源内と中井藍江の接触の可能性は低い。平賀源内は、『名産図会』が編纂されたころには、すでに他界していた。すなわち、平賀源内の名前とこの日付は、誤って付されたか、何らかの理由で故意に付されたと考えるべきである。表紙の『平賀源内物産考』という題は、この付記がもとになっていると考えられる。また『名産図会』の一部の項目が平賀源内の筆による可能性も低い。

4．『名産図会』にも散見する蔀関月による見開きの挿絵とは別類の小さな図が含まれている。その一例として、「序文」の後に、②魚と蛙の十点の図が魚名の記載なく一カ所にまとめて描かれている。これは『名産図会』巻之四「諸国河鹿といふ魚」の図と一致する。『名産図会』では、各魚の解説のそばに配置されている。同写本では、魚名の記載がなく、解説文から切り離されており、挿絵の役割を果たしていない。

5．本書の項目は、『名産図会』の「海」と「山」の項目が大部分をなしている。項目の内容を比較すると、ほぼ一致する場合もあれば、一部が欠けていたり、簡略化されていたり、項目の要約のみが記載されている場合がある。また、文章が途中で途切れていたり、一行欠けている箇所もあるので（「畜家蜂」など）、『名産図会』の草稿とみなすには無理があり、むしろ草稿の不完全な写本とみなすべきだろう。

6．『名産図会』の巻之一の「摂州伊丹酒造」、巻之二の採石関係の項目（「豊島石」「御影石」「龍山石」「砥礪」）及び巻之五の「伊萬里陶器」「近江石灰」「越後織布」は一覧表に挙げられてはいるものの、その内容は欠けている。

7．巻之五の「長崎異国産物」に関しては、内容もなく、一覧表にもない。

8．両書の項目を比較すると、『名産図会』において、本草書の引用などを加えて専門的な議論が展開される部分が、同写本に含まれてない場合が多い。[149]

9．④一覧表の直後にある⑤漁捕品では、一部の魚に対して太字で『名産図会』の項目の概要が付してある。[150] この概要は時にわずか数行である。⑤の末に、別の書体で、「五冊合巻大局」という小文字の記載がある。

10．『名産図会』で明末宋応星の『天工開物』を部分的に引用している項目は、本写本では扱われていない。

上記からもわかるように、同写本の制作時期と役割を確定することは困難だが、『名産図会』編纂中に暫定的に利用された可能性も否定できない。「鮪」の項目内に、「尚図に照らして見るべし」とあるところから、図がすでにでき上がっていたと見るべきである。

また「序文」では、『名産図会』を五巻にまとめたことを述べているので、項目と同時期に作成されたものではない。

この写本の存在から、『名産図会』の成立過程に関して以下のような仮説が提示できる。

『名産図会』は、いくつかの段階を経て作成された。①本書に含まれる項目、すなわち『名産図会』の巻之二～巻之四「漁捕品（すなどりひん）」と「田猟品（かりのしな）」[151]の項目がまず初めにできあがった。②後に「石品」「酒造」「陶器」「石灰」「織布」などが加えられた。③最後に「異国産物」を加えて完成した。初期に作成された項目も、後になって手が加えられた。『天工開物』を引用する項目は、段階②において書かれた。

同写本は「序文」を除いて、蔀関月（あるいは平瀬補世）の遺稿がもとになっていると思われる。『名産図会』の編者である秦石田（本書の「序文」、すなわち『名産図会』の跋文の筆者でもある）は、本草学的知識をさらに盛り込み、すでに出来上がっていた項目に手を加え、あらましのみが伝わった項目の内容を充実させ、さらに新しい項目を加えて、五巻本に仕上げた。中でも、「異国産物」は最後に付け加えられた項目で、蔀関月はその作成には関与していない可能性が出てくる。このように解釈しても、多くの疑問が残る。とりわけ、この遺稿の写しの所持者や「平賀源内」との関係などについて、これからさらに考察する必要がある。

＊拙稿の編集に当たっては、文章・議論の不備のために、本誌の査読者に多大の迷惑をかけた。多くの修正案をいただいたおかげで、論点を明確にすることができた。ここで篤く御礼を申し上げたい。まだ残っているであろう不備な点や誤りの責任が筆者にあることは言うまでもない。

注

（1）刊記が寛政十一年の版本は二種類（①と②）があるが、実際その年に刊行されたのは①のみである。①は奥付に「畫圖　法橋関月／山海名産図会　続篇　近刊／寛政十一己未年正月　浪花書肆　高木遷喬堂梓／心斎橋筋北久太郎町　鹽屋長兵衛」とある。②では「寛政十一己未年正月発行／浪花書林　吉田松林堂／梶木町渡辺筋　播磨屋幸兵衛　心斎橋南久太郎町　鹽屋長兵衛／同　鹽屋卯兵衛」とあるが、鹽屋長兵衛が南久太郎町に移るのは、文化末年か文政初年なので、この版本も文化期以降のものとなる。多治比郁夫「『山海名物図会』と『山海名産図会』―著者と出版事情―」（第二十九回杏雨書屋特別展示会［一九九七年十一月］目録所収）。

（2）パリの図書館の場合、コレージュドフランス（Collège de France）に二部、ビュラック（BULAC）に四部確認され、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによればベルリン国立図書館にも四部保存されている。

（3）たとえば、（早稲田大学蔵）歌川広重三世筆『大日本物産図会』二帖（一八七七）の多くの絵図（「加州熊並膽ヲ取ル図」「丹後国ノ鰤追網之図」「同磯揚之図」「同広島牡蠣畜養之図」「伊豫国鷹捕之図」等）が、それを下敷きにしている。

（4）『日本山海名産図会』及び『日本山海名物図会』は浅見恵・安田健訳編『日本産業史資料1』〈近世歴史資料集成　第2期第1巻〉科学書院、一九九二年にも復刻されているが、解説・解題がないので、本稿では翻刻文のみを参考にする。

（5）浅岡博「本邦商品思想の諸問題と商品学創設への影響―大和本草・物類品隲・日本山海名物図会・日本山海名産図会などを中心として―」『一橋大学研究年報・自然科学研究』十六号、一九七四年、二十三―五十六頁。

（6）複製版『日本山海名産図会』名著刊行会、一九七九年、解説一―十一頁。樋口によると、『日本山海名物図会』の後編は明和五年にすでに予告されており、その企画は早い時期から存在した。

（7）以下①前掲複製版『日本山海名物図会』、樋口秀雄による解説、②前掲『日本名所風俗図会 巻16　諸国の巻1』の長谷章久解説、③多治比郁夫注（1）前掲論文による。

（8）『名物図会』の版本の中には刊記に寛政九年と記されているものがあるが、これは実は板元が変わった年を表し、書肆の所在地によると、再版は文化・文政のころである。『名産図会』の再版は同じ書肆による。多治比注（1）前掲論文。

（9）千葉、長谷及び浅見恵・安田健はこの名前を間違って翻刻しているので、注意を要する。

（10）前掲複製版『日本山海名物図会』、樋口秀雄解説。

（11）同『日本山海名物図会』、巻之五、跋文。

（12）同『日本山海名物図会』、樋口秀雄解説。

（13）赤松閣が書肆の屋号であることは、『名物図会』巻末の「難波書林赤松閣蔵板目録」からも確認できる。

（14）前掲複製版『日本山海名物図会』、樋口秀雄解説。

（15）山本ゆかり「月岡雪鼎・磯田湖龍斎等への僧位叙任について―『御室御記』に関する報告―」『浮世絵芸術』一三二巻、一九九九年、十七―二十五頁。

（16）天明三年から寛政四年までの期間である。寛政四年に懐徳堂は火事のため全焼する。高松良幸「蔀関月の画業―懐徳堂との交流を中心に―」『フィロカリア』十一号、一九九四年。

（17）高松良幸前掲論文、九十五―一〇二頁及び秋田達也「蔀関月と「盧山図」と懐徳堂」奥平俊六編『懐徳堂ゆかりの絵画』大阪大学出版会、二〇一二年、一二六―一五九頁。

（18）鈴木棠三編『日本名所風俗図会12　近畿の巻2』角川書店、一九八五年、解説。

（19）寛政期の大坂出版界の動向については、新修大阪市史編集委員会編『新修大阪市史』大阪市、一九九〇年、第三巻、第五節「出版と情報」。

（20）この書物の著者については、意見が分かれている。永野仁は『日本名所風俗図会11　近畿の巻1』（角川書店、一九八一年）の解説で、『伊勢参宮名所図会』を秦石田（はたせきでん）の作とする見解を述べている。鈴木棠三は『日本名所風俗図会12　近畿の巻2』の解説で、蔀関月の作だとする。『名産図会』に対しても両者の見解は分かれている。議論の焦点になっている跋文に関しては、後述。

（21）本屋仲間の許可は六月に出ているが、刊記には五月とある。

（22）大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』大阪図書出版業組合、一九三六年、一五〇、一五六頁。

（23）詳しくは高松良幸前掲論文。

（24）資料によって千種屋が千草屋と書かれることもあるので、同一視できる。

（25）秋田達也前掲論文、一二八頁。

（26）千葉徳爾前掲書、解題。

（27）大阪歴史博物館編『木村兼葭堂・特別展没後200年記念なにわ知の巨人』思文閣出版、二〇〇三年、二〇四頁。

（28）兼葭堂自身はオランダ語が読めなかったので、蘭学者や通詞の手を借りて編集している。この著作は蘭学者の大槻玄沢（おおつきげんたく）（一七五七―一八二七）の『六物新志（ろくぶつしんし）』と合本で刊行された。木村兼葭堂の本草学の業績については、嘉数次人「兼葭堂の本草学・物産学管見」大阪歴史博物館編前掲書、一四四頁。イッカクに関しては、同書、九十五頁のコラムを参照。

（29）とりわけ「兼葭堂版」と言われる彼の二十冊ばかりの蔵版書において顕著である。多治比郁夫「兼葭堂版」『杏雨』一号、一九八八年、一〇三―一二七頁。

（30）水田紀久・野口隆・有坂道子編『木村兼葭堂全集　別巻　完本　兼葭堂日記』藝華書院、二〇〇九年、七〇九頁。

（31）兼葭堂没後、河内屋吉兵衛という書肆がその遺志を継いで刊行した。新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』大阪市、一九九〇年、第四巻、七四六頁。

（32）樋口秀雄、鈴木棠三及び千葉徳爾は木村兼葭堂が跋文の著者であるとし、本書の作成に密接にかかわったと考えている。

（33）跋文には解読困難なところがあり、浅見恵・安田健訳編前掲書、千葉徳爾前掲書及び『日本名所風俗図会　諸国の巻1』の翻刻文の間に差異がある。ここでは、以下注34、35で引用するところを除き、『日本名所風俗図会諸国の巻1』の翻刻文による。

（34）この傍線の部分は、「ほどほどまされん」とも翻刻されている。いずれも、意味が通らない。

（35）この傍線の部分は、「ことがきを、たちいらへつ」と読まれることもある。

（36）前掲複製『日本山海名産図会』巻之五、跋文。

（37）原本の「とは聞こえぬ」をこのように解釈する。

（38）樋口秀雄は「関月と平瀬が共同で撰にあたり、平瀬没後、絵を担当した画家として関月が『続編日本山海名物図会』の出版を計画したと率直に受け取るのがよいのではないか」と述べている。複製版『日本山海名産図会』名著刊行会、一九七九年、解説八―九頁。

（39）画人藍江に関しては、高松良幸前掲論文、九四頁と大阪市立美術館編『近世大坂画壇』同朋舎出版、一九八三年、二二一・二八六頁。

（40）初版の刊記に高木の名がある。多治比は、高木について、『板木株目録』に登録されていないので素人蔵版者であると推測している。多治比郁夫注

（1）前掲論文。

（41）多治比郁夫注（1）前掲論文。多治比は主に大坂本屋仲間の記録にもとづいている。

（42）鈴木棠三前掲編著『日本名所風俗図会12　近畿の巻2』、一九八頁。

（43）「おのれまた、そのひたんに御して、道のついで見ききしるさんとするも、ただ女児等のめやすからんをのみおもへば、もしほぐさ（藻塩草）かきとるすぢも、ずしだま（数珠玉）のつぶつぶになめて、朽ちたる木のことの葉だにみどころなきは、いかにせまし。」同、一九八頁。

（44）永野仁編『日本名所風俗図会11　近畿の巻1』、角川書店、一九八一年、解説、五二七―五三四頁。鈴木棠三はこの二つの跋文が木村兼葭堂によるという。海驢の古名が「ミチ」であるとする見解は鈴木棠三の指摘である。前掲鈴木棠三編『日本名所風俗図会12　近畿の巻2』解説、七六七―七七〇頁。

（45）市子貞次編『国書人名辞典』第四巻、岩波書店、一九九八年、「村上石田」。『算薮かな付』は、寛政十三年正月に出版許可を得ているが、現物は確認されていない。『算薮』は寛政元年刊の平山千里による和算書である。『日本古典籍総合目録データベース』及び『享保以後大阪出版書籍目録』大阪図書出版業組合編、一九三六年、一六九頁。

（46）前掲『享保以後大阪出版書籍目録』、一六九頁。

（47）西川如見の著作はこの点で時代に先駆けていた。

（48）石川流宣による木版の日本地図で、元禄四年（一六九一）に初版が出ている。

（49）これら両書は当時まだ刊行されていないが、広く名前は知られていた。

（50）『和漢三才図会』巻第六十四に「大日本国」という欄を設けて日本の地誌を扱っているが、やはり中華との対比で展開している。

（51）東京国立博物館蔵の宝永四年版の伝本は、題箋を逸している。前掲複製版『日本山海名物図会』樋口解説。

（52）『国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇三年、「名物」及び「名産」。ここでは、「名物」のもう一つの意味、すなわち、物の命名には言及しない。

（53）『和漢三才図会』に関しては後に述べる。

（54）『和漢三才図会』巻第七十四、「摂津国」。

（55）たとえば、延宝七年（一六七九）の『難波雀』は、大坂の商工業者の住所を網羅している。大坂の買物案内については、以下のリンクを参照。
https://www.library.pref.osaka.jp/nakato/shotenji/67_shoko.html

（56）安田健『江戸諸国産物帳・丹羽正伯の人と仕事』晶文社、一九八七年。

（57）上田穣「宝暦・明和物産会考」有坂隆道他編『論集日本の洋学4』清文堂、一九九七年、一八五―二二六頁。

（58）『国史大辞典』、「和漢三才図会」（執筆、中村幸彦）。

（59）『和漢三才図会』を総合的に捉える研究書・論文は少ない。その全貌を概観するには、寺島良安撰、島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注『和漢三才図会 18』東洋文庫532、平凡社、一九九一年、総目次。

（60）『訓蒙図彙』は版を重ね、後になって『頭書訓蒙図彙』、『頭書増補訓蒙図彙』という題名で広く全国に売り出され、その出版は明治時代まで続いた。石上阿希『江戸のことば絵事典・『訓蒙図彙』の世界』角川選書647、ＫＡＤＯＫＡＷＡ、二〇二一年、三一三―三三〇頁。

（61）巻之一と巻之二のみが確実に彼の作だといえる。朝倉治彦校注『人倫訓蒙図彙』東洋文庫519、平凡社、一九九〇年、解説。

（62）Robert Goree, *Printing Landmarks: Popular Geography and Meisho Zue in Late Tokugawa Japan*, Cambridge and London, Harvard University Press, 2020.

（63）「名所図会は事物の来歴などを客観的に記述し、しかも挿絵は、絵として鑑賞にたえるほかに地理的説明図となっていて、名所案内としての役割と至便さが、名所記にくらべ大きく異なっている」『国史大辞典』、「名所図会」（執筆、鈴木良明）。詳しくは、藤川玲満『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』勉誠出版、二〇一四年、第四章「吉野家為八の出版活動」。

（64）藤川玲満前掲書、二二二頁。
（65）新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』大阪市、一九九〇年、第四巻、七四五頁。
（66）同前。
（67）新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』大阪市、一九八九年、第三巻、一〇一七頁。
（68）岡田玉山は月岡雪鼎に学んだ絵師で、当時絵本挿絵家の第一人者であった。作品に『絵本太閤記』『唐土名勝図会』などがある。前掲『近世大坂画壇』、二七四頁。
（69）丹羽桃渓は蔀関月に学び、風俗人物を描くのを得意とし、木村兼葭堂とも交流があったとされる。挿絵師としては、享和元年（一八〇一）刊『河内名所図会』や寛政十年（一七九八）刊『紙漉重宝記』などの作品がある。
（70）前掲『新修大阪市史』第四巻、七四六頁。
（71）「かな山のはたらき人を下財といふ」、『日本山海名物図会』巻之一、「金山掘口の図」。
（72）『日本山海名物図会』巻之一、「南蛮鞴」。
（73）たとえば、巻之一「鉛」では、「今絵の具に用ゆる丹は、別に鉛を焼きてこしらゆるなり。また白粉も鉛をやきて制するなり。各制法あり、別書にしるす」とあるが、この場合、別書が『和漢三才図会』であることは間違いないと思われる。
（74）『日本山海名物図会』巻之三、「樟脳製法」。
（75）千葉徳爾前掲書、解題、三〇一頁。
（76）『本朝食鑑』巻之九、鱗部之三、「鯨」参照。著者は、採れるくじらの全長から、その技術の水準を判断している。
（77）『日本山海名物図会』巻之一、目録。
（78）『日本山海名物図会』巻之五、「鯨遠見（くじらのとおみ）」。
（79）例えば、享保十六年の写本『鯨魚の図』や享保八年の画をうつした『鯨絵巻』の類である。鯨の絵は、おそらく現地の人間によって描かれたとみえて、こちらの方が光信の絵より正確である。
（80）捕鯨を扱う絵入り書物で刊行されたものとして、山瀬春政の『鯨志』があるが、これは、宝暦十年（一七六〇）刊で、『名物図会』より後になる。福本和夫著『日本捕鯨史話』改装版、法政大学出版局、一九九三年、七十頁。磯野直秀「江戸時代鯨類図説考」『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』一六号、一九九四年、二十五―三十六頁。
（81）「予素勢肥鯨采之事ヲ聴ク」と述べている。『本朝食鑑』巻之九、鱗部之三、「鯨」。十七世紀における食物本草に関しては、Matthias Hayek, “On the Reception and Uses of Li Shizhen’s Classified Materia Medica (*Bencao gangmu*) in 17th-century Japan,” *Studies in Japanese Literature and Culture*, National Institute of Japanese Literature, 2021, no. 4, pp. 95–122.
（82）『日本山海名物図会』巻之五、「八月枯鮎」。
（83）『和漢三才図会』には、「諸国の谷川海に続く処皆之れ有り」と言って、多くの例を挙げている。
（84）「日向国よりいずるうなぎ甚だ大き也。ふとさは一尺まわり長さ六尺余なるあり。余国にはなき大うなぎ也」、『名物図会』、巻之五、「瀬田鰻」。
（85）『大和本草』巻之十三、「鰷魚（あゆ）」。益軒会編『益軒全集』六巻、国書刊行会、一九七三年、三一九頁。
（86）人見必大撰、島田勇雄訳注『本朝食鑑』巻之三、東洋文庫340、平凡社、一九七八年、三十二頁。
（87）『農業全書』（一六九七刊）の口絵などがその例である。
（88）産業別の分類は千葉徳爾前掲書、解題による。
（89）例えば、「蜂蜜」、「捕熊（くまをとる）」、「堅魚（かつお）」においては、関連の加工品の製造をも紹介しているので、絵の数も増え、文も長くなっている。
（90）近畿の産物でない場合、原産地において得た情報がとぼしいことが多い。たとえば、千葉徳爾前掲書、解題、三〇〇頁。

(91) 『和名抄』、『本草綱目』、『大和本草』などがもっとも代表的な参考文献である。『和名抄』は『和名類聚抄』の略称で、平安中期の源順による辞書。元和三年（一六一七）の古活字版に始まる一連の版本が存在する。『本草綱目』についてはのちに述べる。

(92) 「古歌に、味酒の三輪、又三室といふ枕言なりと冠字考にはいへり」『日本山海名産図会』巻之一、「造醸」。

(93) 『日本名産図会』巻之一、「造酒」。

(94) ここで使われている漢字は酝ではなく、さらに複雑なものである。

(95) 同前。

(96) 『日本山海名産図会』巻之一、「醸酒酝」。

(97) 『本朝食鑑』は当時の酒造法を適切に記述していない。『和漢三才図会』の場合、酒造専門書に近い記述になっている。鎌谷親善「江戸時代初期における酒造技術」『化学史研究』二十一号、一九九四年、三二一頁。

(98) 『日本山海名産図会』巻之一、「造醸」。

(99) 『日本山海名産図会』巻之一、「造醸」。

(100) 「今は伊丹・池田その他同国西宮・兵庫・灘・今津などに造り出だせる物また佳品なり」同。

(101) 『日本山海名産図会』巻之一、「造醸」。

(102) 『日本山海名産図会』巻之一、「酘」。

(103) 鎌谷親善「「酒造手引草、伊丹酒造諸式之控」について―『日本山海名産図会』との関連において―」『酒史研究』十四号、一九九七年、二十七―三十六頁。

(104) 同前、三十二頁。

(105) 同じような誤記は他の項目にもある。たとえば、巻之五「石灰」においては『天工開物』の引用が部分的に欠けており、理解の混乱を招いている。

(106) マグロ（真黒）という名前は当時「東国」のみで使われていた。

(107) 目録には平戸鮪とあり、文中には「平戸岩清水のものを上品とする」と述べている。

(108) 「網は目八寸許にして、大抵二十町許、細き縄にて制す。底ありて、其形箕のごとし。尻に袋あり」

(109) 「この魚頭大にして嘴尖り鼻長く口頷の下にあり。頬腮鉄兜のごとく、頬の下に青斑あり。死後眼に血を出す。背に棘鬣あり。鱗なし。蒼黒にして肚白く雲母の如し。尾に岐有、硬して、上大に下小なり。大なるもの十二丈、小なる者七八尺、肉肥て厚く、此魚頭に力あり」『日本山海名産図会』巻之三、「鮪」。

(110) ここでは、「付記」とは記されていないが、それに相当する内容である。

(111) 『本草綱目』を指す。

(112) この字書がどの書物を指すか明らかでないが、『名産図会』で参考にしている字書に『釈名』、『通雅』などがある。

(113) 『閩書』（一五〇巻）は明代の福建省の地誌で、閩は福建省を指す。何喬遠の作で、一五二〇年に成立し、一六三一年に刊行された。

(114) 『日本山海名産図会』巻之三、「鮪」。

(115) 元和三年版『和名類聚抄』巻之十九、「鮪」

(116) 『日本山海名産図会』巻之三、「鮪」。

(117) 説明によると、長さ二十町の網を要し（約二キロに相当し）、それにかかる魚は何万であるという。多少誇張があるとしても、当時の経済にとって、相当重要な位置を占めていたことがわかる。

(118) 『日本山海名産図会』巻之五、「昆布」。

(119) 『日本山海名物図会』巻之四、「松前昆布」。

(120) 蝦夷の民族を最も早く紹介し、広く写本として流布した新井白石の『蝦夷志』（一七二〇）は図入りだったが、蝦夷地を背景に人物や器物を描くことはしていない。発禁処分となった林子平（一七三八―一七九三）の『三国通覧図説』（一七八六刊）も、アイヌの絵を数枚含んではいるが、風景画ではない。

(121) たとえば、小玉貞良（こだまていりょう）の「蝦夷国風図会」（函館市中央図書館デジタル資料館蔵）や「蝦夷国漁場風俗図巻」（函館図書館所蔵地域資料アーカイブ）等がすでに、運上屋や漁場を題材にしている。白石恵理のご教示による。

(122) 有坂道子「好奇心と求知心―兼葭堂とその周辺―」『木村兼葭堂没後二百年記念シンポジウム・兼葭堂の日本文化―旅とサロンと開かれた知性―』臨川書店、二〇〇二年、四頁、及び同「木村兼葭堂のネットワークにみる知の交流」CEL: Culture, Energy and Life、一一七号、二〇一七年、三十四―四十一頁。

(123) 『草茅危言』巻之二、「蝦夷の事」。

(124) 「唐船入津」と「阿蘭陀船」である。

(125) 『日本山海名産図会』巻之五、「陶器」。

(126) 『天工開物』については後に述べる。

(127) 柏崎諒編『富田万里子コレクション　長崎版画展』学藝書院、二〇一七年、十一―十三頁、十八―二十六頁。野々上慶一編『長崎古版画』三彩社、一九七〇年、図56。

(128) 柏崎諒前掲書、成澤勝嗣解説、七十七頁。

(129) 鈴木棠三編『日本名所風俗図会12　近畿の巻2』角川書店、一九八五年、一九八頁。

(130) 同前。

(131) 『日本山海名産図会』巻之四、「八目鰻」。

(132) Annick Horiuchi "Naturalizing Li Shizhen's *Bencao gangmu* in Early-modern Japan: The Cases of *Honchō shokkan*, *Yamato honzō*, and *Wakan sansai zue*," *Studies in Japanese Literature and Culture* 4 (March 2021), pp. 117–140.

(133) 引用は『天工開物』の第七巻「陶埏」と第十一巻「燔石」からである。たとえば、『名産図会』「石灰」中の「灰用方（はいのようほう）」は、『天工開物』「燔石」中の「石灰」を部分的に書き下したものである。『名産図会』が(2)「越後織布」の項目で『天工開物』を引用していないのは、後者が絹の生産に集中しているからだと思われる。

(134) 薮内清「天工開物について」薮内清編『天工開物の研究』、恒星社厚生閣、一九五三年、一―二十四頁。

(135) 書肆は河内屋八兵衛で、序文に木村兼葭堂所蔵本に校訂が加えられたことをいう。宋應星撰、薮内清訳注『天工開物』東洋文庫130、平凡社、一九六九年、三七五頁。

(136) 土井康弘『本草学者　平賀源内』講談社選書メチエ407、講談社、二〇〇八年、一〇八頁。

(137) 『日本山海名産図会』、巻之五、「伊万里陶器」。

(138) 同前。

(139) 長い附記なので、以下に冒頭だけ引用する。「或云あこやといえるは所の名にして尾張の国知多郡にあり。又奥州にも同名あり。又『新猿楽記』には阿久夜玉と見ゆ。『万葉集』の鮑玉を『六帖』にあこや玉と點ぜり。云々」『日本山海名産図会』、巻之三、「真珠」。

(140) 当時の水準を代表する書物として、平賀源内の『物類品隲』（一七六三刊）や小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（一八〇三―一八〇五年刊）が挙げられる。

(141) 鉱業は『天工開物』の第十四巻「五金」で扱われており、その構成や挿絵の上で『名物図会』と共通点が見受けられる。

(142) 前掲『新修大阪市史』第四巻、第四章、第五節。

(143) 木村兼葭堂の日記を見る限り、藤家弥兵衛、鹽屋次郎右衛門や河内屋太郎右衛門の名前が頻繁に現れる。水田紀久他前掲書、索引。

(144) 高松良幸前掲論文。

(145) 玉葛、むさしあぶみ、もしほぐさ、つしだま、などである。

(146) 秦石田は村上九兵衛の名前で兼葭堂の日記に（天明九年に一回、寛政五年に二回、寛政十一年に一回）、合計四回現れている。中井藍江の場合は、合計八回で、寛政十年には二度、木村宅を訪れている。水田紀久他前掲書、

索引。

(147) 大阪の杏雨書屋に伝わる写本『平賀源内物産考』が、『名産図会』と密接な関係にあり、これをもとに、その編纂過程について仮説を立てることができる。この点については本稿の付記を参照。

(148) 黒川真頼（一八二九―一九〇六）は江戸末期から明治初期の国学者で維新後は官途につき、多くの教育・編纂事業にかかわった。美術史・風俗史にも通じ、複数の著作がある。今では分散したその蔵書も、有名である。

(149) 例えば、巻之二「芝菌品」の冒頭部分、巻之三「鮪」における鮪の名前に関する議論、同「牡蠣」における末尾部分などである。

(150) 「八目鰻」「章魚」「河鹿という魚」「鰒」「海鰕」「鰤網」「鮪」「生海鼠、贅海鼠、海鼠腸」「海膽」「白魚」「鱒」の場合である。

(151) 『名産図会』巻之二において、「石品（いしのしな）」「芝菌品（たけのしな）」「田猟品（かりのしな）」などの分類が見られる。「田猟品（かりのしな）」には、「鷹」「梟」「熊」関連の項目が含まれる。

表1　『日本山海名物図会』総目録

巻之一	巻之二	巻之三	巻之四	巻之五
金山かねやま堀口の図	紺青緑青製法	日光膳椀	住吉宝市	河蝦かわえび
銅山諸色渡方の図	緑礬ろうは製法	仙台馬市	大和三輪素麺	八月枯鮎さびあゆ
銅山鍛治	黐とりもちの製法	越前福井石橋	伊予牛蒡	淀鯉
金山諸道具	大和御所柿　京木練柿　大和渋柿	越前奉書紙	松前昆布	瀬田せた鰻うなぎ
金山鋪口かねやましきくち	美濃釣柿	樟脳製法	松煙取図	江鮒えふな引網
金山鋪の中の絵	炭焼図	讃岐平家蟹	加賀笠	蜆貝
鉛石はくいしくだく絵	杣人そまびと	池田炭	天王寺牛市	摂州尼崎鳥貝
銀山淘汰かねゆりの絵	材木流しの図	住吉浦潮干しほひ	京深草陶器かわらけ	章魚
山神祭	摂州木津干瓢かんぴょう	堺包丁	安芸宮島浜市	海人
釜家の絵図	宇治茶摘	江戸浅草紫菜のり	宮島船祭	梭魚かます児
銅山床家とこや	茶製法ちゃのこしらへ	京西陣織屋	有馬籠細工	鰮いわし網
鉛	茶名物大概	漆製法	奈良晒	赤鱈あかえい　海鼠なまこ
真鞴まふきぶき大工所作	焙籠はいろ	摂州平野飴	伊吹艾草	鯨遠見
金山淘汰きんざんかねゆりの絵	紀伊国蜜柑	天王寺干蕪かぶら	河内小山団扇	鯨吹気図
南蛮鞴なんばんぶき	江戸四日市の蜜柑市	豊後河太郎	奥州仙台紙子	鯨置網
鉄山の絵	近江蔓菁かぶら、尾張大根	大坂瓦屋町	天満市側いちのかは松茸市	鯨突船
鉄の踏鞴たたら		塩浜	道明寺干飯ほしいひ	鯨引寄図
灰吹はいぶき		薩摩大島黒砂糖		
銅山ふき金渡し方		大坂北浜米市		
		晒蝋		

表2　『日本山海名物図会』産業別分類

産業の種類	項目例
鉱山業（19）	鉱山の種類、鉱具、採鉱、冶金、職分、行事
農産業（17）	牛蒡、蜜柑、樟脳、漆、製塩、製糖、晒蝋、製茶
水産業（21）	河魚（河蝦、鮎、鯉等）、海魚（鰮、赤鱈、海鼠）、鯨
加工業（13）	西陣織屋、瓦師、紙、籠細工等
石、炭産業、林業（5）	石、炭産業、林業
市場、祭（6）	牛市、馬市、大坂米市等

（　）は項目数を示す。千葉徳爾編『日本山海名産・名物図会』（社会思想社、1970 年）解題 p. 300 による。

表3 『日本山海名産図会』総目録

巻之一	巻之二	巻之三	巻之四	巻之五
摂州伊丹酒造	（石品） 豊島石 御影石 龍山石 砥礪 （芝菌品） 芝さいはいたけ 日向香蕈 熊野石芝 同蜂蜜　蜜蝋　会津蝋 山椒魚 吉野葛 山蛤 高峰蘡薁蟲えびづるのむし （田猟品） 鷹羅たかあみ 鳧羅かもあみ 予州峰越鳧　摂州霞羅　無雙返 捕熊　堕弩おし　洞中熊　以斧撃 取膽　試真偽　製偽膽	（漁捕品） 伊勢鰒　長鮑　真珠 伊勢海鰕 丹後鰤　追網　立網　附 他国鰤 平戸鮪　冬網 讃州鰆　流網 若狭鯛　同鰈　并 塩蔵風乾　附 他国鯛 讃州榎股振網　同五智網 能登鯖　同他国釣舟 広島牡蠣　同畜養法　種類	土佐堅魚　熊野 讃州海鼠なまこ　贅海鼠いりこ 海鼠腸このわた 越前海膽うに 西宮白魚　桑名　附 麺條魚どろめ 氷魚ひを 桑名焼蛤　時雨蛤 賀茂川鮴ごり　加賀浅野川 予州大洲石伏 神道川鱒 諏訪湖八目鰻　赤魚 明石章魚　長濱 滑川大梢魚なめりがわおおだこ 高砂望潮魚たかさごいひだこ 河鹿　八瀬　鼓瀧　井堤　附 魚の品類	備前水母くらげ 近江石灰　并 美濃 伊萬里陶器いまりやき 越後織布えちごぬの 松前臚肭おっとっ　昆布　胡狭笳こさふへ 唐船入津　菩薩揚ぼさあげ 阿蘭陀船

項目名は各巻の目録による。

表４　『日本山海名産図会』各巻の産業類

巻之一	酒造業（1）
巻之二	採石業（4）、茸類採取業（3）、狩猟業（4）、養蜂業（1）、山蛤・虫類採取業（4）
巻之三～四	漁業（23）
巻之五	織物・窯業（3）、長崎・蝦夷における交易（3）

（　）内は項目数

表５　『天工開物』と『日本山海名産図会』の間の共通の産物

天工開物	日本山海名産図会
第二巻「乃服いふくのしな」	巻之五「越後織布えちごぬの」
第六巻　「甘嗜さとうはちみつ」内「蜂蜜」	巻之二「蜂蜜」
第七巻　「陶埏やきものこしらえ」	巻之五「伊万里陶器」
第十一巻「燔石いしをやくわざ」	巻之五「石灰」
第十七巻「麴糵こうじもやし」内「酒母さけこうじ」	巻之一「摂州伊丹酒造」
第十八巻「珠玉たまたからいし」内「珠」	巻之三「真珠」

明和８年（1771）刊の和刻本を比較の対象にする。フリガナもこの和刻本による。

表6　『平賀源内物産考』の構成及び『日本山海名産図会』との比較

	『平賀源内物産考』	『日本山海名産図会』
①	序文（題なし） 「明和元年八月平賀源内鳩渓述」	『名産図会』の跋文
②	魚と蛙の図（一丁）	巻之四　附「諸国に河鹿といふ魚」の図
③	漁捕品	巻之三　漁捕品
	鰒　制長鮑　真珠	巻之三　鰒　制長鮑　真珠
	海鰕	巻之三　海鰕
	鰤	巻之三　鰤
	鮪	巻之三　鮪
	鰆	巻之三　鰆
	若狭鰈　小鯛　他国鯛網	巻之三　若狭鰈　同小鯛　他国鯛網
	鯖	巻之三　鯖
	牡蠣	巻之三　牡蠣
	堅魚　漁捕（部分）	巻之四　堅魚
	なまこ（二行）	巻之四　生海鼠
	うに（二行）	巻之四　海膽
	しろうを（数行）	巻之四　白魚
	鮴ごり（あらまし）	巻之四　鮴
	鱒ます（あらまし）	巻之四　鱒
	八目鰻やつめうなぎ（部分）	巻之四　八目鰻
	章魚（部分）	巻之四　章魚
	河鹿（和歌四首のみ）	巻之四　河鹿
④	一覧表	巻之一、巻之二、巻之三、巻之四、巻之五の目次
⑤	八目鰻（附記の一部）	巻之四　八目鰻
	章魚（簡略）	巻之四　章魚
	河鹿という魚	巻之四　諸国に河鹿といふ魚
	鰒（あらまし）	巻之三　鰒
	海鰕（あらまし）	巻之三　海鰕
	鰤網（一行のみ）	巻之三　鰤網
	鮪（二行のみ）	巻之三　鮪
	生海鼠　贅海鼠 海鼠腸（産地＋数行）	巻之四　生海鼠　贅海鼠 海鼠腸
	海膽（部分）	巻之四　海膽
	白魚（部分）	巻之四　白魚
	鱒（部分）	巻之四　鱒
	水母（あらまし）	巻之五　水母
⑥	脇肭獣（あらまし）	巻之五　脇肭獣
	芝	巻之二　芝
	香蕈	巻之二　香蕈
	石芝	巻之二　石芝
	蜂蜜	巻之二　蜂蜜
	蜜蝋　会津蝋	巻之二　蜜蝋、会津蝋
	鯢	巻之二　鯢
	葛（部分）	巻之二　葛
	山蛤（部分）	巻之二　山蛤
	蘡薁蟲（部分）	巻之二　蘡薁蟲
	鷹（部分）	巻之二　鷹
	鳧	巻之二　鳧
	峰越鳧	巻之二　峰越鳧
	捕熊　取膽（部分）	巻之二　捕熊　取膽